

ね や みなみ  
寝 屋 南 遺 跡

—寝屋南地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2009. 3

寝屋川市教育委員会



堅穴住居跡001



堅穴住居跡003

## 序

寝屋南遺跡は、本市寝屋南2丁目に所在する遺跡です。遺跡周辺は寝屋川市東部の丘陵が広がっており、田畠や竹林・雑木林の残る緑豊かな地域で、近年まで大きな開発もなかったため、遺跡の内容についてはよくわかつていませんでした。この地を南北に縦断する第二京阪道路の建設に伴って、財団法人大阪府文化財センターによって行われた発掘調査の結果、飛鳥時代の堅穴住居跡や建物跡が発見されて、同時期の集落遺跡が存在することが明らかになりました。

この第二京阪道路調査地に隣接する地域で土地区画整理事業が計画され、平成20年2月～3月に試掘・確認調査を実施し、その結果明らかとなつた飛鳥時代のほか弥生時代の遺構・遺物を検出し、遺跡が丘陵上に大きく広がっていることがわかりました。そして、事業の実施に伴う造成工事等で遺跡の失われる部分について、記録保存を目的に発掘調査を実施しました。弥生時代後期の堅穴住居跡9棟や小石室をもつ古墳の発見など大きな調査成果を得ることができ、現地調査終了時に、報道記事提供を行うとともに遺跡の現地説明会を開催して遺跡を公開し、多くの市民が遺跡を見学に訪れました。

本報告書は、上記の発掘調査と、現地調査終了後に引き続き行った遺物整理作業の概要をまとめたものです。本書が地域の歴史研究の基礎資料として活用され、本市の歴史や文化財に対する理解を深めるための一助となることを希望します。

なお、今回の調査の実施にあたりましては、発掘調査や遺物整理の費用負担をはじめ多大なるご協力を賜りました寝屋川市寝屋南地区土地区画整理組合をはじめ、お世話になりました関係機関・関係各位に厚くお礼申し上げます。また、発掘調査および遺物整理作業に携わった方々に、深く感謝の意を表します。

寝屋川市教育委員会では、私たちの祖先が残しあるいは受け継いできた様々な文化財の保護を行い、私たちの子孫に伝えていく所存です。今後とも、本市文化財保護行政にご理解・ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます

平成21年3月

寝屋川市教育委員会

教育長 竹若洋三

## 例　　言

1. 本書は、土地区画整理事業に伴って実施した、寝屋川市寝屋南2丁目所在の寝屋南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および出土遺物整理は、寝屋川市寝屋南地区土地区画整理組合（理事長 川口茂明）から依頼を受けて、寝屋川市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査・出土遺物整理等並びに本書の作成に要した費用は、寝屋川市寝屋南地区土地区画整理組合が負担した。
4. 現地における調査は、株式会社島田組が作業を担当し、試掘・確認調査を平成20年2月4日から実施し、埋蔵文化財が確認された区域の発掘調査については、3月4日より開始して6月28日に終了した。
5. 本書の作成に係る出土遺物整理事業は、寝屋川市立池の里市民交流センターの遺物整理室において、一部を現地調査と併行して実施し、現地調査終了後は本格的に作業を進めて、平成21年3月31日に本書の刊行をもって終了した。
6. 現地調査および出土遺物整理は、寝屋川市教育委員会文化振興課技術職員の濱田延充が担当して行った。調査の実施に当たっては、文化振興課長（平成20年3月31日まで）塙山則之および文化振興課係長（平成20年4月1日から）濱田幸司の協力を受けた。
7. 本書の編集および執筆は、濱田延充が行った。本書に掲載した図面の作成・浄書は、濱田のほか調査員・調査補助員があつた。また、土器実測図の浄書は、株式会社地域文化財研究所の協力を得た。
8. 現地調査および出土遺物の整理さらに本書の作成に当たり、下記の方々にご指導・ご教示を賜った。  
(順不同・敬称略)

石野博信（徳島文理大学）、桑原久男（天理大学）、若林邦彦（同志社大学歴史博物館）、岡村道雄（元・奈良文化財研究所）、小林義孝・森屋直樹・森井貞雄（大阪府教育委員会）、大野 薫・秋山浩三・三好孝一・伊藤 武・市村慎太郎・中尾智行（財團法人大阪府文化財センター）、山内紀嗣・日野 宏（天理大学付属天理参考館）、池田保信（埋蔵文化財天理教調査団）、奥田 尚（奈良県立橿原考古学研究所）、田中元治（財團法人和歌山県文化財センター）、安村俊史（柏原市立歴史資料館）、野島 稔・村上 始（四條畷市教育委員会）、森岡秀人（芦屋市教育委員会）、柳本照男

9. 調査に参加したのは、下記の方々である。(五十音順・敬称略)

現地調査〔外業調査員〕戸掘 功

〔調査補助員〕丹生雅子、山中麻衣子

遺物整理〔内業作業員〕浅野美佐子、須崎美千代、竹内節子

10. 本書に掲載した土器実測図は、全て断面白抜きとした。
11. 本調査において得られた出土遺物および調査において作成した写真・実測図等の記録資料は、寝屋川市教育委員会で保管している。歴史資料として広く活用されることを希望する。

## 目 次

第Ⅰ章 調査の経緯 ······	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境 ······	3
第Ⅲ章 試掘・確認調査の成果 ······	6
第Ⅳ章 発掘調査の成果 ······	10
1 検出された遺構	
(1) 2007年度調査区 ······	10
(2) 2008年度調査区 ······	14
2 出土した遺物	
(1) 弥生時代の遺物 ······	31
(2) 飛鳥時代の遺物 ······	40
第Ⅴ章 まとめ ······	42

## 挿 図 目 次

第1図 調査地位置図 (S = 1 / 5000) ······	1
第2図 周辺遺跡分布図 (S = 1 / 25000) ······	5
第3図 試掘・確認調査区配図 ······	7
第4図 遺構配図 (S = 1 / 1000) ······	9
第5図 建物1実測図 (S = 1 / 40) ······	11
第6図 建物2実測図 (S = 1 / 40) ······	12
第7図 土坑1および溝1実測図 (S = 1 / 40) ······	13
第8図 古墳平面実測図 (S = 1 / 80) ······	14
第9図 古墳石室実測図 (S = 1 / 20) ······	15
第10図 堪穴住居跡001実測図 (S = 1 / 50) ······	17
第11図 堪穴住居跡002・004実測図 (S = 1 / 50) ······	19
第12図 堪穴住居跡003実測図 (S = 1 / 50) ······	20
第13図 堪穴住居跡005実測図 (S = 1 / 50) ······	21
第14図 堪穴住居跡006実測図 (S = 1 / 50) ······	23

第15図	堅穴住居跡007・009実測図 (S = 1/50)	25
第16図	堅穴住居跡008実測図 (S = 1/50)	27
第17図	建物001・002実測図 (S = 1/40)	28
第18図	2008年度調査区土坑実測図 (S = 1/40)	30
第19図	弥生土器実測図 (1)	32
第20図	弥生土器実測図 (2)	34
第21図	弥生土器実測図 (3)	36
第22図	弥生土器実測図 (4)	38
第23図	匙形土製品実測図	40
第24図	飛鳥時代土器実測図	41

## 写 真 図 版 目 次

- 図版 1 a. 調査区全景(北西から)  
b. 同上(北東から)
- 図版 2 a. 2007年度調査区 北側部分(南西から)  
b. 2007年度調査区 南側部分 建物1・2(西から)
- 図版 3 a. 2007年度調査区 土坑1(西から)  
b. 2007年度調査区 溝1(北から)
- 図版 4 a. 2008年度調査区 塚状遺構樹木伐採後現況(北から)  
b. 2008年度調査区 塚状遺構表土除去状況(北から)
- 図版 5 a. 2008年度調査区 塚状遺構盛土除去後土層断面(東から)  
b. 2008年度調査区 塚状遺構下部古墳石室検出状況(東から)
- 図版 6 a. 2008年度調査区 古墳石室内石材片出土状況(北から)  
b. 2008年度調査区 古墳全景(南から)
- 図版 7 a. 2008年度調査区 古墳石室床面検出状況(南東から)  
b. 2008年度調査区 同上(南から)
- 図版 8 a. 2008年度調査区 古墳主体部墓壙掘方完掘状況(南から)  
b. 2008年度調査区 古墳主体部石材除去状況(北から)
- 図版 9 a. 2008年度調査区 堅穴住居跡001検出状況(北西から)  
b. 2008年度調査区 同上(南東から)
- 図版10 a. 2008年度調査区 堅穴住居跡001炭化材等検出状況(北から)  
b. 2008年度調査区 堅穴住居跡001完掘状況(北から)
- 図版11 a. 2008年度調査区 堅穴住居001A北側炭化材検出状況(西側部分・北から)  
b. 2008年度調査区 堅穴住居001A北側炭化材検出状況(中央部分・北から)

- c. 2008年度調査区 堪穴住居跡001B北側炭化材検出状況（東側部分・北から）  
d. 2008年度調査区 堪穴住居跡001B南側焼土等検出状況（北から）
- 図版12 a. 2008年度調査区 堪穴住居跡001A壁溝検出状況（西から）  
b. 2008年度調査区 堪穴住居跡001A壁溝 手焙形土器出土状況  
c. 2008年度調査区 堪穴住居跡001A壁溝 炭化材出土状況（手前が住居内部）  
d. 2008年度調査区 堪穴住居跡001A壁溝 断面炭化材検出状況（右が住居内部）
- 図版13 a. 2008年度調査区 堪穴住居跡002検出状況（南東から）  
b. 2008年度調査区 堪穴住居跡002堆積土層断面（北西から）
- 図版14 a. 2008年度調査区 堪穴住居跡003検出状況（南東から）  
b. 2008年度調査区 堪穴住居跡003堆積土層断面（南東から）
- 図版15 a. 2008年度調査区 堪穴住居跡003完掘状況（南東から）  
b. 2008年度調査区 同上（北東から）
- 図版16 a. 2008年度調査区 堪穴住居跡003 P1（西から）  
b. 2008年度調査区 堪穴住居跡003 P2-1（南から）  
c. 2008年度調査区 堪穴住居跡003 P2-2（南から）  
d. 2008年度調査区 堪穴住居跡003 P3-1・2（南から）  
e. 2008年度調査区 堪穴住居跡003 P4-1・2（南から）  
f. 2008年度調査区 堪穴住居跡003中央土坑（東から）  
g. 2008年度調査区 堪穴住居跡003南側土坑遺物出土状況（北から）  
h. 2008年度調査区 堪穴住居跡003南側土坑（東から）
- 図版17 a. 2008年度調査区 堪穴住居跡004完掘状況（西から）  
b. 2008年度調査区 同上（南東から）
- 図版18 a. 2008年度調査区 堪穴住居跡005遺物検出状況（西から）  
b. 2008年度調査区 堪穴住居跡005北側ベット状遺構（西から）
- 図版19 a. 2008年度調査区 堪穴住居跡005完掘状況（東から）  
b. 2008年度調査区 堺穴住居跡005完掘状況（南から）
- 図版20 a. 2008年度調査区 堪穴住居跡005東壁中央（入口部分）土器出土状況  
b. 2008年度調査区 堪穴住居跡005中央部土器出土状況（南から）  
c. 2008年度調査区 堪穴住居跡005ベッド状遺構壁炭化材検出状況（南から）  
d. 2008年度調査区 堪穴住居跡005南西隅土器出土状況（南から）
- 図版21 a. 2008年度調査区 堪穴住居跡006堆積土層断面（南西から）  
b. 2008年度調査区 堪穴住居跡006完掘状況（北東から）
- 図版22 a. 2008年度調査区 堪穴住居跡007完掘状況（西から）  
b. 2008年度調査区 堪穴住居跡007北西隅炭化材等検出状況
- 図版23 a. 2008年度調査区 堪穴住居跡008炭化材等検出状況（北東から）  
b. 2008年度調査区 堪穴住居跡008完掘状況（南東から）

- 図版24 a. 2008年度調査区 壺穴住居跡008炭化材出土状況（1）  
b. 2008年度調査区 同上（2）
- 図版25 a. 試掘・確認調査D調査区 壺穴住居跡009検出状況（南から）  
b. 2008年度調査区 壺穴住居跡009完掘状況（東から）
- 図版26 a. 2008年度調査区 土坑004（南から）  
b. 2008年度調査区 土坑012（東から）  
c. 2008年度調査区 土坑013（西から）  
d. 2008年度調査区 土坑015（北から）
- 図版27 a. 2008年度調査区 土坑003検出状況（北から）  
b. 2008年度調査区 土坑003堆積土層断面（北から）  
c. 2008年度調査区 土坑003完掘状況（北から）  
d. 2008年度調査区 土坑003断ち割り状況（北から）
- 図版28 弥生土器（1）
- 図版29 弥生土器（2）
- 図版30 弥生土器（3）
- 図版31 弥生土器（4）・焼土塊（壺穴住居跡001）・匙形土製品
- 図版32 a. 打製石器  
b. 同（裏面）  
c. 砥石
- 図版33 a. 古墳棺台石材接合状況（1）  
b. 同（裏面）  
c. 古墳棺台石材接合状況（2）  
d. 同（裏面）

## 第Ⅰ章 調査の経緯

寝屋南遺跡は、寝屋川市寝屋南2丁目付近に広がる遺跡である。昭和50年代に付近の畑から土器小片が採集され、遺跡が存在することが判明したが、周辺では発掘調査等も行われず、遺跡の実態は不明であった。

遺跡の中央部を南北に縦断する第二京阪道路の建設が計画され、平成13年に財団法人大阪府文化財センターによって遺跡内で初めての発掘調査が行われた。この調査で、飛鳥時代（7世紀）の堅穴住居跡・掘立柱建物が発見され、想定外の飛鳥時代の遺跡の存在が明らかとなった。

今回、第二京阪道路に隣接する寝屋川市宇谷町・寝屋南一丁目・同二丁目・池の瀬町にまたがる約22.7haについて、土地区画整理事業の計画が持ち上がり、平成17年度に事業を指導する本市まち政策部都市計画室より事業計画地での埋蔵文化財の取り扱いについての問い合わせがあった。教育委員会文化振興課では、周知の埋蔵文化財包蔵地である寝屋南遺跡の範囲に事業計画地の東側部分が該当すること、東側に隣接する第二京阪道路建設に伴う発掘調査によって7世紀中頃の堅穴住居跡等の遺構が検出され、同時期の集落遺跡が存在することが明らかとなり、隣接する事業計画地へ集落遺跡が広がっている可能性が高いことを述べ、文化財保護法に定められた届出の提出と遺跡の広がりを確認するための試掘・確認調査及び、同調査によって明らかになった遺跡において現状での遺跡の保存が困難な部分については発掘調査の実施が必要となることを説明した。



第1図 調査地位置図 (S = 1/5000)

平成19年に土地区画整理事業が都市計画決定され、同年寝屋川市寝屋南地区土地区画整理組合が設立し、平成19年12月27日付けで、同組合より文化財保護法第93条に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。文化振興課では都市計画室および業務代行者である鹿島道路株式会社・東急不動産株式会社共同企業体と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、平成20年1月23日付けで、上記土地区画整理組合と埋蔵文化財に関する協定書を締結して、試掘・確認調査を実施することとした。平成20年2月6日付けで大阪府教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財発掘調査の報告」を提出し、試掘・確認調査を開始した。

試掘調査の結果、第Ⅲ章で報告するとおり南側の丘陵上で弥生時代の集落遺跡が確認され、飛鳥時代の遺跡の存在が想定された第二京阪道路隣接の地区とともに、発掘調査を実施することとした。なお、試掘調査の結果により遺跡の範囲が西側に大きく広がることが判明し、事業者の上記土地区画整理組合に「遺跡発見の届出」の提出を指示し、4月24日付けで提出された同発見届出を大阪府教育委員会に進呈した。

発掘調査については、第二京阪道路に隣接する畠地の調査を平成20年3月初めから開始し、飛鳥時代の建物跡等の遺構・遺物を検出し、同年4月4日に調査を完了した。引き続き、試掘・確認調査で明らかとなった南側丘陵について調査を開始し、弥生時代後期末の堅穴住居跡9棟や小石室をもつ古墳などを検出した。発掘調査の実施によって以上の大きな調査成果を得たことから、6月10日に報道記事提供を行い、6月14日に市民に現場の公開を目的とした現地説明会を実施した。現地説明会当日は、300名を超える多くの見学者があった。現地調査は、現地説明会前日の6月13日にヘリコプターによる航空測量のための写真撮影を行った後、遺物の取り上げや実測図作成作業等を行って、6月26日に終了した。

出土遺物の整理作業は、一部現場作業と並行して実施したが、現地調査終了後に市立池の里市民交流センターの遺物整理室で、アルバイト内業作業員による洗浄・台帳登録・遺物注記・接合・復元の各作業を行った。遺物の実測及び净書(トレース)及び写真撮影等の作業を行って、本書の刊行をもって完了した。

## 第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

寝屋南遺跡の所在する寝屋川市東部は生駒山地から続く丘陵・台地が広がっており、遺跡周辺では、標高50m程度の舌状の丘陵が西あるいは北西方向にのびている。発掘調査前は、調査地周辺の丘陵上は竹林や雜木林で、一部に畑として利用されており、谷筋は水田や蓮田となっていた。ただし、現状は竹林等になっているところでも、昭和30年代ぐらいまでは畑として利用されていたところもあり、今回の調査地でもそうした畑に伴う耕作遺構が確認できた。

遺跡の周辺では、これまで大規模な開発もなく、田畠や自然の緑が多く残る地域であった。このため、後述する第二京阪道路建設に伴う発掘調査以前は、発掘調査が行われた遺跡も少なく、各遺跡の内容については明らかになっていなかった。

寝屋川市教育委員会で寝屋地区周辺で発掘調査を行った唯一の事例である伝寝屋長者屋敷跡遺跡では、時期不明の竪穴住居1棟と中世以降の耕作（畑）遺構を検出したことにどまつたが、旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代～弥生時代の石鎌が出土し、この地域が古くから人々の活動の場であったことが明らかとなった。旧石器時代のナイフ形石器（サヌカイト製国府型ナイフ）は、太秦遺跡・讃良川遺跡のほか第二京阪道路建設に伴う調査でも高宮遺跡で出土しており、本市東部丘陵周辺で出土例が増加している。

縄文時代の遺跡は、周辺では未発見である。北河内地域の生駒山麓部では、枚方市穂谷（早期）・交野市神宮寺（早期）・星田旭（中期）、寝屋川市高宮（前期）・讃良川（中期）、四條畷市更良岡山（後～晩期）・南山下（中期）といった各時期の遺跡が知られている。上記の伝寝屋長者屋敷跡では当該期に属する可能性のある石鎌が出土しており、周辺には未発見の遺跡が眠っている可能性がある。

弥生時代になると、北河内地域では河内潟周辺の寝屋川市高宮八丁・四條畷市讃良郡条里・雁屋、大東市中垣内の各遺跡で、前期に始まる集落が見つかっている。特に讃良郡条里遺跡では、出土土器の特徴より近畿地方最古の弥生時代集落と考えられ、注目される。また、第二京阪道路建設に伴う調査では、天野川流域の交野市私部南遺跡で縄文時代晩期の土器に混じて弥生時代前期土器が出土した。

弥生時代中期では、寝屋南遺跡南西1kmの丘陵上に太秦遺跡が出現する。同遺跡では古くから数多くの石器・土器が採集されている一方で発掘調査成果が乏しく遺跡の実態が不明であったが、第二京阪道路建設に伴う発掘調査で南側の丘陵上で20棟を超える竪穴住居跡が検出されるとともに、西側の丘陵上では方形周溝墓で構成される墓域（大尾遺跡）が検出され、集落遺跡の実態が明らかになった。太秦遺跡同様に丘陵上に展開する比較的規模の大きい集落として、北河内地域では枚方市星丘西・田口山の両遺跡が知られている。

弥生時代後期になると、寝屋南遺跡周辺でも遺跡の存在が知られるようになる。タチ川をはさんで北側の丘陵上に所在する寝屋遺跡では、同時期の長頸壺の破片が採集されている。また、北西側の寝屋川北側の丘陵上に所在する池の瀬遺跡でも後期中頃の土器が出土している。

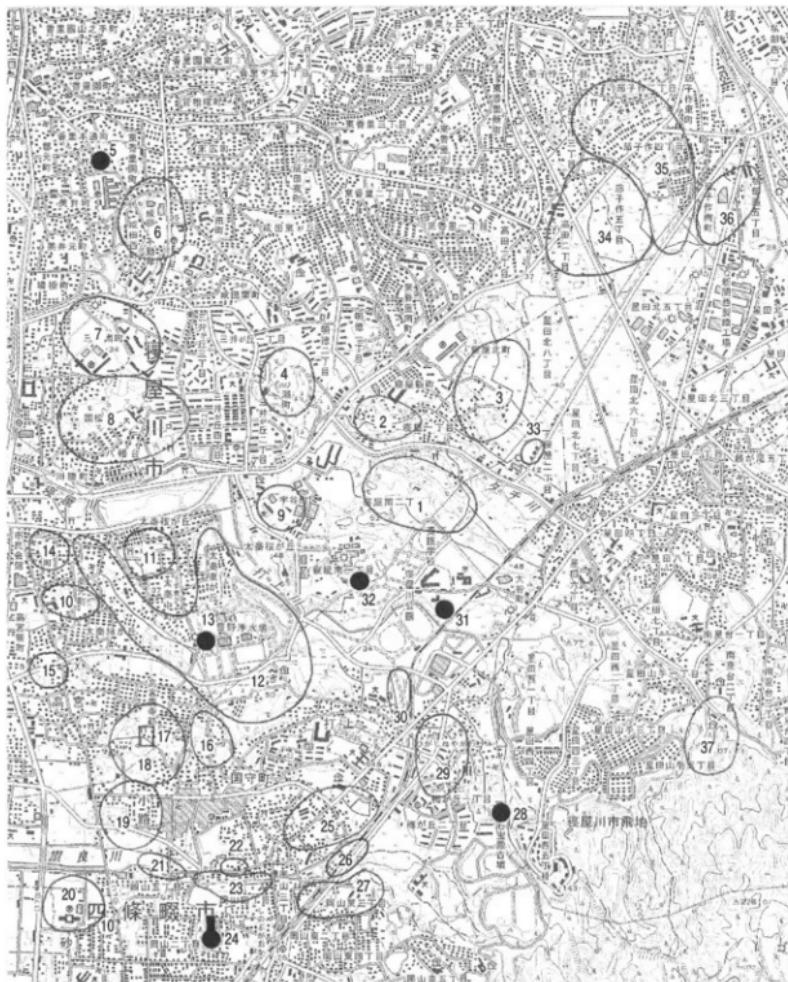
古墳時代前期～中期の遺跡は、周辺では未発見である。天野川流域には上流域の森古墳群をはじめ、中流域の藤田山古墳・下流域の禁野車塚古墳といった北河内地域では前期古墳が集中する。

古墳時代中期になると寝屋南遺跡の南西側の太秦丘陵上に、太秦古墳群が形成される。現在する太秦高塚古墳（市指定史跡）は、直径約40mの造り出しきをもつ円墳で、巫女・水鳥・鶴などの豊富な形象埴輪をもつ。また、第二京阪道路建設に伴う調査で、方墳を中心とする小型の古墳が群集して検出されている。集落遺跡は、交野市森・私部南・枚方市村野・茄子作等の多くの遺跡が見つかっている。森遺跡では鉄器製作関連遺物が多数出土しており注目される。

後期古墳としては、寝屋南遺跡の谷を挟んだ南側の丘陵上に、北河内地域最大規模の横穴式石室をもつ寝屋古墳（大阪府指定史跡）が存在する。また、同古墳の立地する丘陵の西側300mの地点で、第二京阪道路建設に伴う調査で新たに横穴式石室をもつ古墳が発見・調査され、奥山1号墳と命名された。終末期（飛鳥時代）の古墳としては、寝屋南遺跡の南側1.5kmの山麓に、横口式石槨を主体部とする北河内地域唯一の古墳である石宝殿古墳（国指定史跡）がある。

古代・律令期になると、遺跡周辺は枚方・交野両市の台地および丘陵に設置された交野郡に属するようになる。第二京阪道路建設に伴う発掘調査で、大きな成果を得ることができた。寝屋南遺跡では、今回の調査地の東隣で遺跡内では初めての発掘調査が実施され、掘立柱建物跡5棟及び竪穴住居跡2棟が検出された。建物はいずれも正方位をとるもので、遺跡の性格を考えるうえで重要である。また、寝屋南遺跡の北西のタチ川北側の台地上に立地する寝屋東遺跡でも、同時期の多数の建物跡が検出された。

奈良時代以降平安時代にかけて、周辺では遺物の出土が見られなくなる。再び遺物が出土するようになるのは中世である。伝寝屋長者屋敷跡遺跡では、この時期の耕作遺構が検出されており、丘陵・台地上の本格的な開発が始まったと考えられる。なお、「御伽草子」に収録されている「はちかづき」に登場する姫の実父である「備中守さねたか」の居宅（長者屋敷）が寝屋村にあったという考証が、江戸時代前期に書かれた『河内鑑名所記』などに記されている。具体的な資料等も無く、これらの考証で説かれているこの地と「はちかづき」の結びつきについては不明であるが、中世における台地上の開発を行った有力者（開発領主）の伝承があって、それと結びついたのかも知れない。なお、鉢かづき姫をモチーフにした寝屋川市のマスコットキャラクター「はちかづきちゃん」は、いわゆる「ゆるキャラ」の元祖として、市内外のイベント等で本市のPRに活躍している。また、平成2年から実施した「寝屋川文化と歴史のネットワークづくり事業」では、市内10コースのネットワークルートの文化財の説明・案内サインを、鉢かづき姫をモチーフとして設置している。さらに長者屋敷跡と推測される場所の一角を公園として整備している。



1. 寝屋南遺跡
2. 寝屋遺跡
3. 寝屋東遺跡
4. 池の瀬遺跡
5. 郡八幡古墳
6. 成田遺跡
7. 三井南遺跡
8. 秦山遺跡
9. 太秦北遺跡
10. 太秦元町遺跡
11. 太秦庵寺跡
12. 太秦遺跡
13. 太秦高塚古墳
14. 神宮寺跡
15. 法復寺遺跡
16. 大尾遺跡
17. 高宮庵寺跡
18. 高宮遺跡
19. 小路遺跡
20. 砂遺跡
21. 讀良川遺跡
22. 三味頭遺跡
23. 更良岡山遺跡
24. 忍岡古墳
25. 上垣内遺跡
26. 国守遺跡
27. 坪井遺跡
28. 石宝殿古墳
29. 打上遺跡
30. 打上中道遺跡
31. 寝屋古墳
32. 奥山1号墳
33. 伝斐屋長者屋敷跡
34. 茄子作深浦遺跡
35. 茄子作遺跡
36. 上の山遺跡
37. 星田旭遺跡

第2図 周辺遺跡分布図 (S = 1/25000)

### 第Ⅲ章 試掘・確認調査の成果

試掘・確認調査は、集落遺跡の存在が想定される丘陵上の平坦部分に幅約2.5mの筋掘り（トレンチ）調査区を設定し、機械で表土等を除去し、その後人力で精査を行って、遺構および遺物の確認を行った。また、遺構の存在が希薄と思われる谷部分についても2m×2mの壺掘り調査を行い、遺構・遺物の確認を行った。

#### 北側丘陵（A丘陵）

AおよびH～M区の7ヶ所のトレンチ調査区を設定して調査を行った。このうちJ～Lの3ヶ所の調査区は地形等の関係により二分して調査を行った。AおよびI区では東側にあった養魚池（釣り堀）に関わる近年の大規模な造成によると考えられる削平が行われていた。このほか竹林であったHおよびJ2・K2・L区でも竹林造成時に造成が行われたと考えられ、遺物包含層等認められなかった。畑であったJ1およびK1区でも畑耕土層を除去すると地山面が現われ、畑にする際に丘陵上部を削平して平坦にしていると考えられた。J1調査区では遺構・遺物は検出されなかつたが、K2区中央で小穴（ピット）が検出され、埋土より7世紀中頃の須恵器・坏身が出土した。このため、この畑部分での遺構の広がりを確認するため両調査区間に新たにM区を追加設定して調査を行った。しかし、この調査区でも遺構・遺物は検出できず、遺構の検出されたK2調査区を部分的に南北に広げて、この小穴に連続する遺構の検出に努めたが、ここでも遺構・遺物は発見されなかつた。最終的に小穴を掘り上げたが、深さは10cmで、この遺構は上部が削平された柱穴がわずかに残っていたものと想定された。

#### 南側丘陵（B丘陵）

B～Gの6ヶ所のトレンチ調査区を設定して調査を行った。丘陵尾根部を東西方向に継断するE調査区はE1～E3の3調査区に分割して調査を行った。B区では、堅穴住居跡1棟および柱穴と思われる小穴（ピット）3基が検出され、堅穴住居跡周辺で弥生土器（後期）の破片が出土した。また、D調査区南端の部分で堅穴住居跡の可能性のある落ち込みが検出され、ここからも弥生土器が出土している。E区でもE2区で堅穴住居跡1棟と小穴1基、F区でも小穴2基、G区でも小穴4基が検出されている。堅穴住居跡は部分的な検出であるが、一辺約5mの隅丸方形の平面プランを持つものに復元できる。B区で検出した堅穴住居跡では、焼土や炭化材が埋土中に多く含まれており、いわゆる焼失住居（火災住居）と考えられる。小穴は直径15cm程度のもので、埋土の掘削は行っていないため出土遺物等が未確認で時期決定ができないが、おおむね堅穴住居跡と同じ弥生時代後期のものと思われる。

#### 西側丘陵（C丘陵）

現在独立した丘陵であるが、東側は造成によって大きく抉られて崖面を形成しており、本来は南丘陵（B丘陵）とつながっていた可能性もある。N～Pの3ヶ所のトレンチ調査区を設定して調査を行つた。いずれの調査区も表土層の下には竹林の養生土または地山層しか確認できず、遺構は検出できなかつた。O調査区で、表土層より土器小片2点が出土している。いずれも摩耗が激しく時期比定は困



第3図 試掘・確認調査区配置図

難であるが、軟質で弥生土器かもしれない。

#### 古墳状隆起（X地点）

事前の踏査の段階で、B丘陵南側斜面で、直径約15m、高さ約5mの古墳状の隆起を確認した。樹木および竹の伐採を行った後に、測量を実施した。さらに、隆起部分に十文字に直行する幅1mの筋掘りの調査区を設定し、古墳であるかどうかの確認を行った。その結果、表土以下は、自然の地層で盛土等の人の手の加わった事実は確認できなかった。このため、この隆起は自然地形と判断される。

#### 谷部分の調査

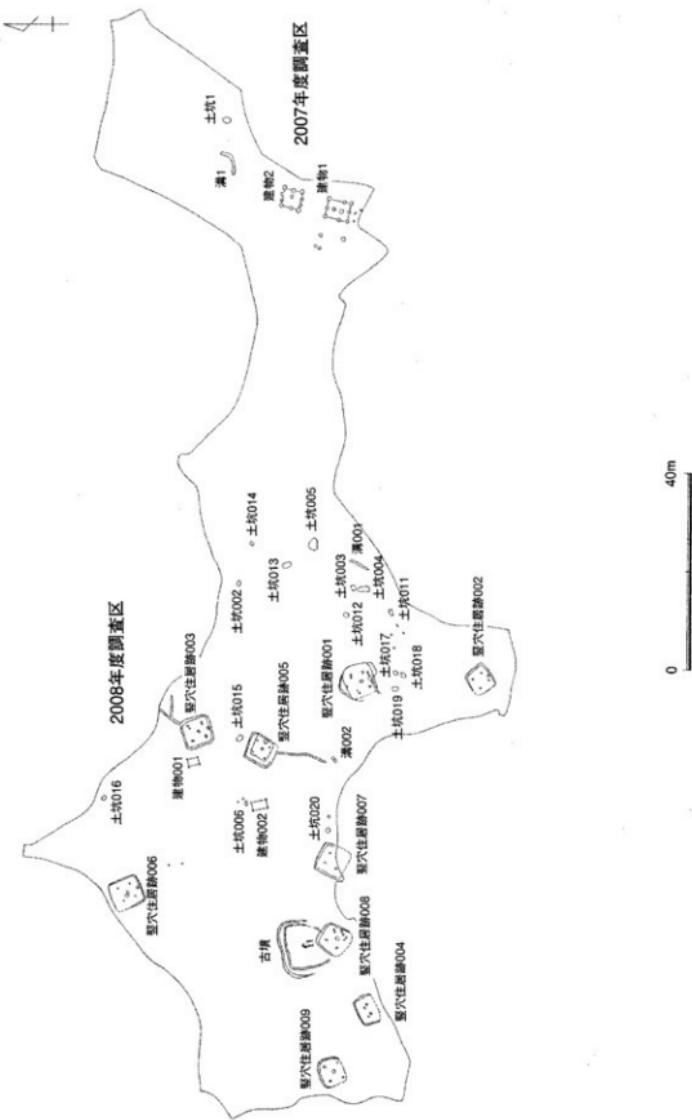
谷部分については、堆積土が多く深くなると考えられたので、平面形が2m×2mの壺掘りの調査区を設定して調査を行った。北丘陵（A丘陵）北側の谷部分に4ヶ所（1～4区）、南側丘陵（B丘陵）の南側の谷部分に2ヶ所（5・6区）、両丘陵の間の谷部分に2ヶ所（7・8区）の計8ヶ所の調査区を設

定して、機械で堆積土を除去しながら調査を進めた。いずれの調査区でも遺構・遺物は検出できなかつた。

### 試掘・確認調査の結果

試掘・確認調査によって南側丘陵（B丘陵）上で、弥生時代後期の遺構・遺物を検出することができ、集落遺跡が存在することが明らかになった。弥生時代の遺構は各調査区で検出され、丘陵上全面に広がっていると想定された。この丘陵は、土地区画整理事業の実施に伴って、大規模な造成（切土）工事の計画されており、現状での遺跡の保存が困難なため、記録保存を講じるための発掘調査が必要と判断された。

北丘陵（A丘陵）および東丘陵（C丘陵）では、若干の遺構・遺物が検出されたものの、その広がりを確認することができず、発掘調査の必要は無いと判断した。調査地では筍の生産のための、竹林の養生の土入れや造成によって地形の変更が行われている場所が多く、一部ではそれ以前に畑として土地利用されていた場所もあり、幾度となく造成工事が行われた結果、本来存在した遺跡が失われた可能性がある。



第4図 遺構配置図 ( $S = 1/1000$ )

## 第Ⅳ章 発掘調査の成果

### 1 検出された遺構

#### (1) 2007年度調査区

第二京阪道路に隣接する畠地部分については、財団法人大阪府文化財センターによる発掘調査の成果より、飛鳥時代の遺構の存在が想定されたため、確認調査を行わず当初より本発掘調査を実施することとした。この部分を2007年度調査区とし、平成20年3月より調査を開始した。

現地表面下は、機械によって畠の耕作土層を除去すると、地山となる黄灰色シルト層となり、その上面で柱穴・溝・土坑を検出した。遺物包含層となるような土層は無く、後述するように検出遺構も浅い。後世の畠等の造成により、遺構面がかなりの削平を受けていると考えられる。以下、主要な遺構の説明を行う。

#### 建物1

調査区南側で検出された、梁間2間×桁行3間の南北方向の建物である。建物内部に東柱をもつ総柱の建物で、高床倉庫に復元できよう。ただし、東西の柱列とも北から2番目の柱穴が検出できなかった。柱穴は一辺60~80cmの平面方形を意識して掘られている。梁間の柱間は1.8~2.0m、桁行の柱間は1.2mで、床面積は17.6m<sup>2</sup>になる。

#### 建物2

建物1の北側で検出された、梁間2間×桁行3間の東西方向の建物である。建物1同様に、建物内部に東柱をもつ総柱建物に復元できる。ただし、この建物でも西側の東柱が検出できなかった。梁間の柱間は1.8~2.0m、桁行の柱間は1.2~1.4mで、床面積は14.4m<sup>2</sup>となる。

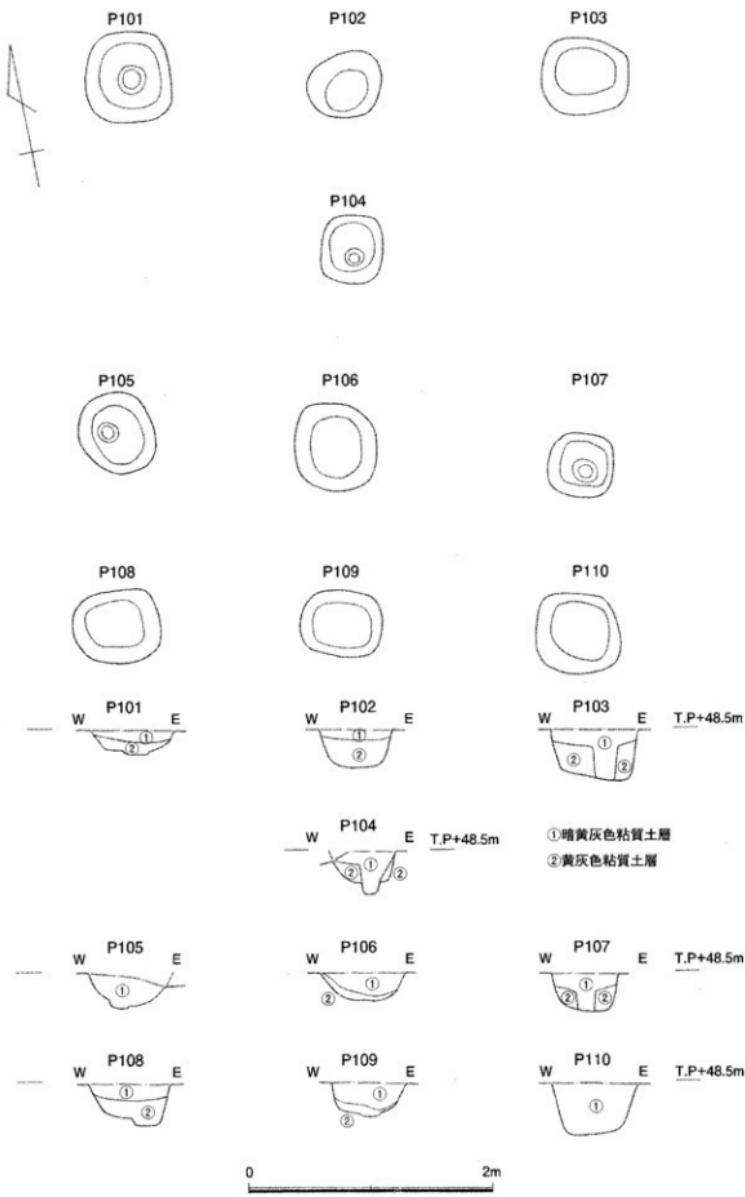
建物1とは方位がほぼ同じであるだけでなく、東西の柱通りがほぼ一致する。両建物が同時期だとすれば、計画的な配置であると言えよう。

#### 溝1

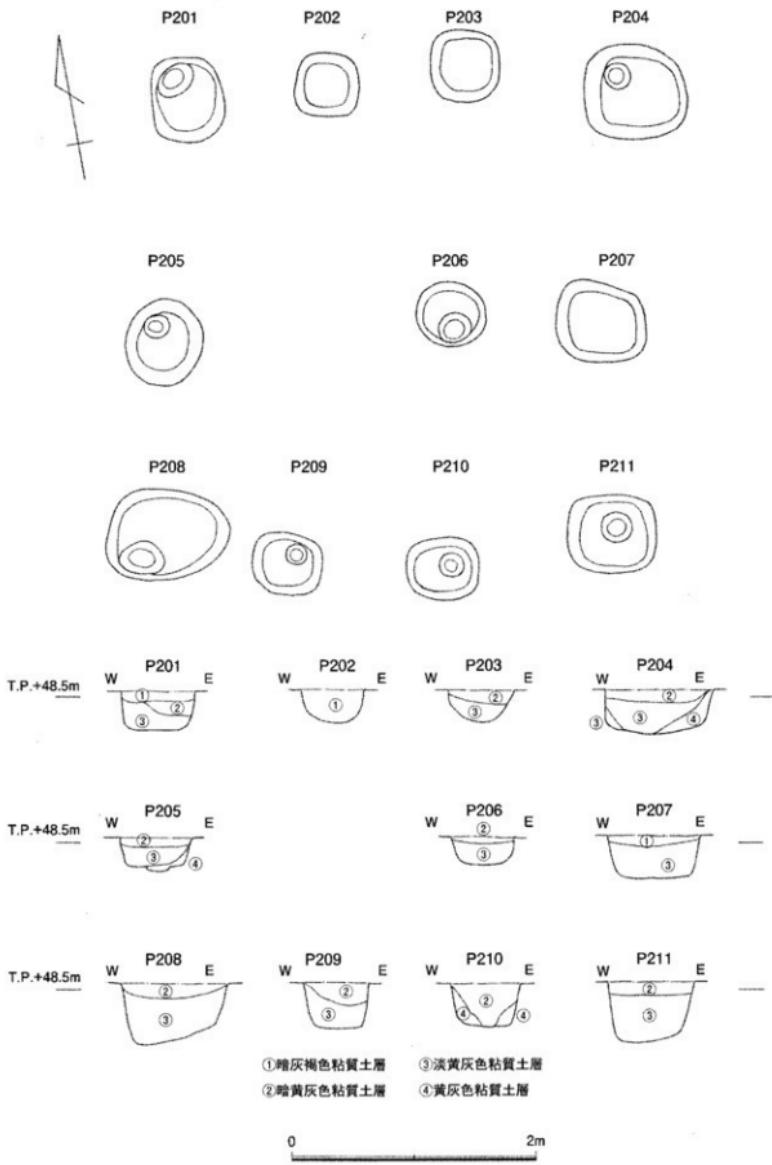
調査区中央で検出された、検出長約4mの逆L字形に曲がる溝である。幅40~50cmで、検出された深さは、10cmと浅い。埋土は灰黄色粘質土で、埋土内より須恵器壺2点が出土した。

#### 土坑1

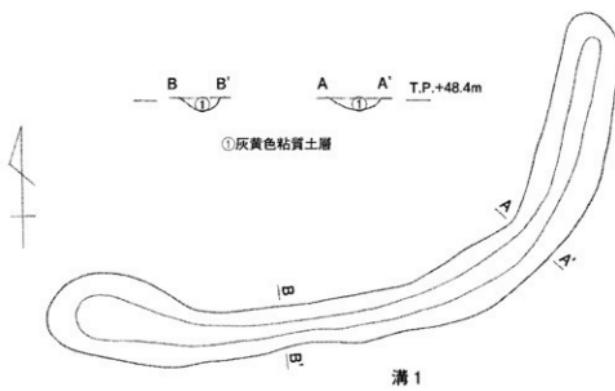
溝1の東側で検出した、平面長円形の深い土坑である。南北1.6m、東西1.2m、深さは5cmをはかる。埋土は炭を多く含む黒褐色粘質土で、埋土中より土師器壺1個体分の破片が出土している。



第5図 建物1実測図( $S=1/40$ )



第6図 建物2実測図 ( $S = 1/40$ )



0 2m

第7図 土坑1および溝1実測図 ( $S = 1/40$ )

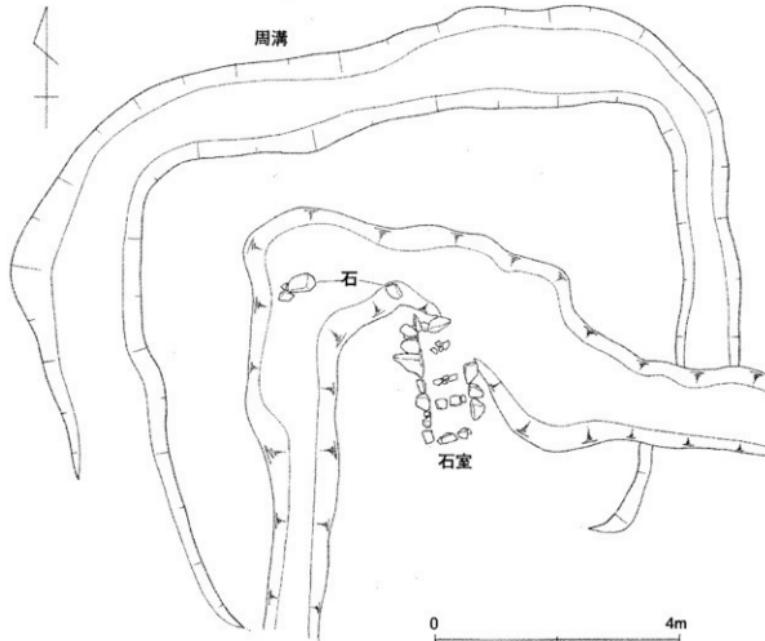
## (2) 2008年度調査区

2007年度調査区の西側に続く尾根上では、前章の試掘・確認調査の結果、弥生時代の集落遺跡が存在していることが明らかとなり、2007年度の調査終了後の平成23年4月から本格的に発掘調査を開始した。調査は、機械によって表土層を除去後、人力による掘削及び精査を行い、遺構の検出を行った。表土の下には、竹林の養生土や以前の畑の耕作土が部分的に認められた。また、丘陵縁辺部の斜面では上部からの出土物の二次的な堆積が観察された。しかし、遺構の検出された弥生時代や飛鳥時代の遺物包含層は認められず、2007年度調査区同様に地山となる黄灰色シルト層上面で遺構の検出を行った。なお、丘陵上には畑や竹林に伴うと思われる溜池や溝が多く存在し、また樹木の根も多く、遺構の検出の支障となった。丘陵上面の尾根部分を調査した結果、竪穴住居跡9棟をはじめ土坑・溝などの弥生時代後期の遺構と、飛鳥時代と推定される小石室をもつ古墳を検出した。

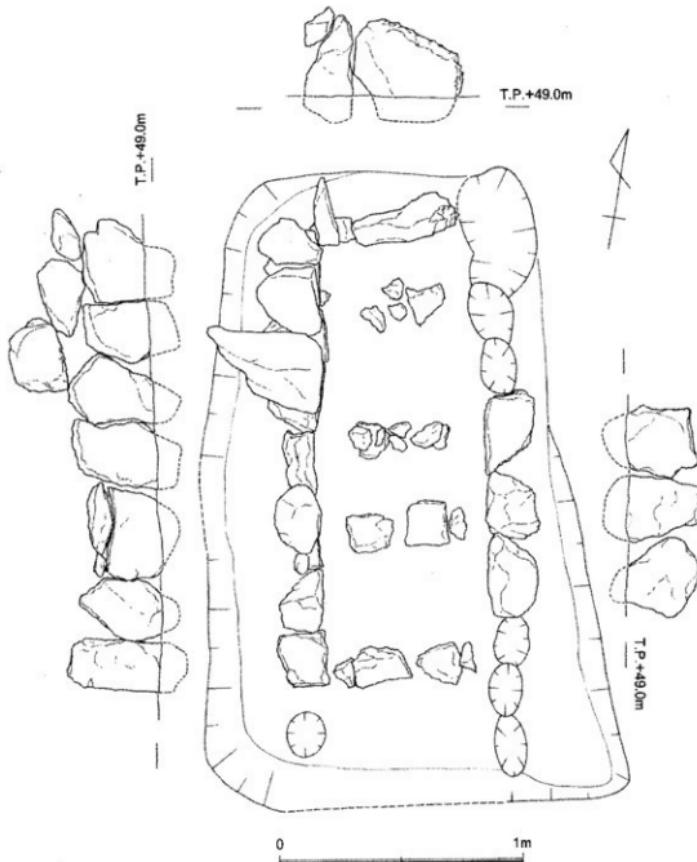
### 飛鳥時代の遺構

#### 古墳

試掘・確認調査を実施するため、調査地周辺の樹木の伐採を行っている際に、丘陵西側で直径約2m、高さ約1mの塚状の高まり（Y地点）が発見された。高まり上には、本来この遺構に伴うかは疑問であるが、石仏が倒れた状態で置かれていた。このため経塚や中世以降の墳墓の可能性を想定しながら、調査を進めることとした。



第8図 古墳平面実測図 ( $S = 1/80$ )



第9図 古墳石室実測図(S=1/20)

土層観察用のセクションを残しながら、塚状の高まりを掘り下げていった。高まり部分に生えていた竹の根が内部まで繁茂しており土層観察は困難であったが、この高まりが人為的な盛土であると判断された。また、盛土内に掘り込まれた遺構は、確認できなかった。盛土内からは近世以降の瓦や陶器の破片が出土し、この盛土が比較的新しい時期に行われたことが判明した。なお、盛土内には比較的多く小円碟が含まれており、洗浄して確認を行ったが、文字の墨書等は発見できなかった。

塚状の高まり部分の盛土を全て除去すると、直径20~30cmの石が頭を出しており、さらに作業を進めると「コ」の字形の石列となることが判明した。この段階で、塚状遺構の下層に存在する石列遺構を古墳の石室と判断して、調査を進めることとした。石室内に土層観察用のセクションを残しな

がら掘り下げて床面の検出を行った。石室は壁面の最下段の石材が残っており、床面には棺台と思われる4列の石を検出した。また、石室内部には石材片と思われる小石を多く含む黄褐色土が充填していた。

調査の結果、石室は南側に入口をもつ、長さ2.1m、幅0.7mの小型の無袖式の横穴式石室であることが判明した。西側の壁は、入口部分の石が抜き取られている以外は良好に遺存しており、奥壁に近いところでは2段目の石材も残っていた。一方、東壁の石材は3石しか残っておらず、奥壁にかかる3~4石が失われている。奥壁の東側部分の石材も破損が大きい。ちょうど、この部分に東側からの後世の溝がぶつかって、さらに古墳を迂回するように北側を巡っている。丘陵上の開墾時に溝を掘った時にこの石室を破壊し、その際に作業者によって墓等の認識がされて、溝が石室を避けて掘られると同時に、その供養のために上記の盛土が新たに行われた可能性がある。なお、古墳が築造時の姿をこの段階まで保っていたかについては、古墳周辺に散乱する石室の石材が少なく、特に天井石と思われるものが無いことを考慮すると、それ以前に墳丘部分の破壊が進んでいた可能性が高いと思われる。

石室は、一周り大きい墓壙を掘削した後、構築されている。一段目の石は、石材を割って加工した平坦な面を内側にして立てられている。石材には板状の石もあり、内部を凹凸無いように平滑に見せるように意識されていたことがうかがわれる。床面には入口付近から20~30cmの間隔で棺台となる4列の石列が検出された。南側の石列では石材の接合関係が認められ、石室石材を加工した際の石屑を棺台に使用したと推定される。石室内からは、棺・人骨・副葬品等の遺物は発見できなかった。

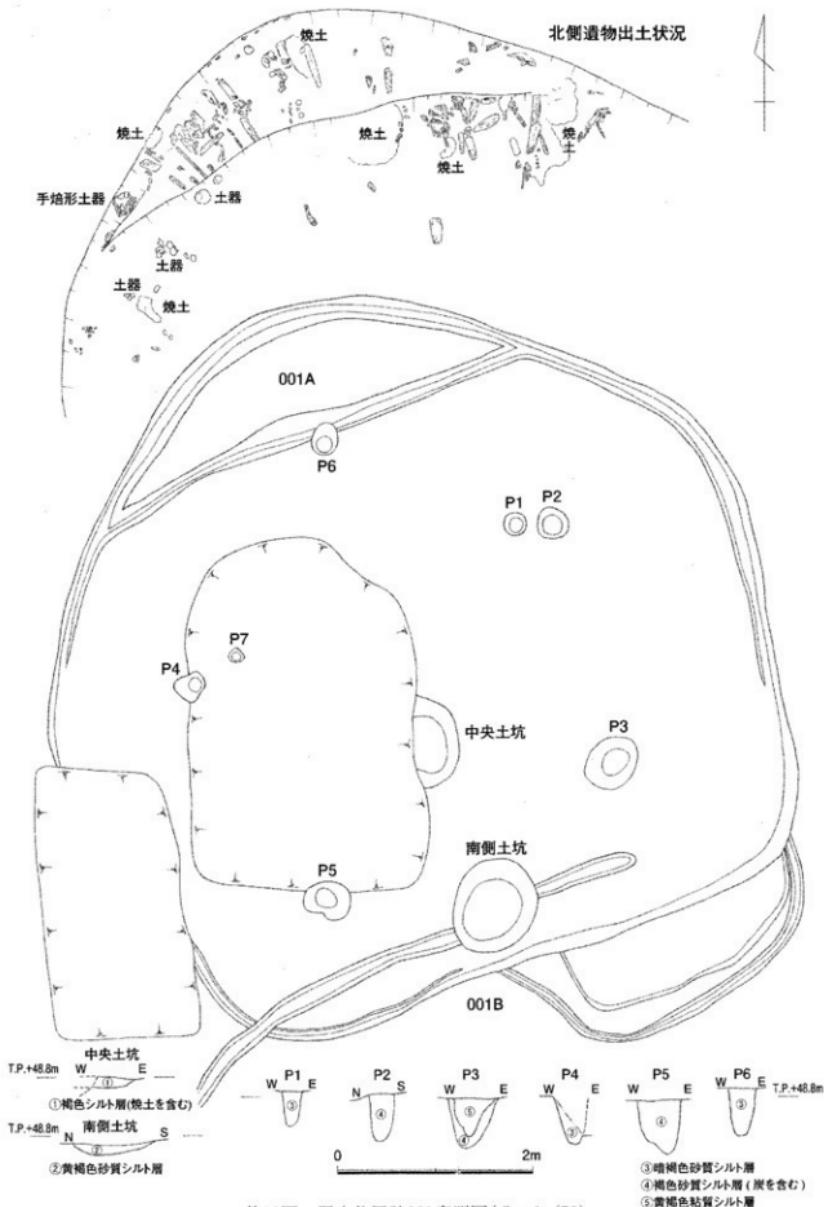
古墳は盛土が失われており、その墳形は不明である。ただし、石室の周辺を見ると、上記の石室を破壊した溝の外側に、幅0.5~1m、深さ20cmの溝が石室を囲むように巡っている。これを古墳に伴う周溝とすれば、一辺9m程度の方墳となろう。溝内からは、土器等の遺物は出土していない。

古墳は、石室内から土器等の遺物が出土しておらず、築造時期を決定するのが困難である。石室が小規模で棺を入れると余裕の無い石槨状を呈すること、さらに石室内部を平滑に見せるのは切石の横穴式石室及び横口式石槨の影響と考えると、7世紀以降のいわゆる終末期に築造されたと推定される。寝屋南遺跡では、東側の2007年度調査区～第二京阪道路調査地で7世紀中頃の建物が検出されており、古墳もこれらの遺構と関連づけることが可能であろう。

## 弥生時代の遺構

### 竪穴住居跡001

調査区西側の、尾根上平坦部で検出された竪穴住居跡である。試掘・確認調査B調査区で、東側の一部が検出され、その後、2008年度調査によって全容が確認された。遺構検出時には、北側が突出していたため、多角形の平面形をもつ可能性を考えたが、埋土を掘り下げて床面を確認した段階で、床面が二段となっていることが判明し、位置をずらして建替えられた2棟の平面方形の住居が重複していることが判明した。炭化材の出土状況等より南側の床面が深い住居が新しいと判断される。このため北側の古い住居を001A、南側の新しい住居を001Bとして、説明を行う。試掘・確認調査区で東側部分の一部を削平されているほか、中央部及び西側部分が溜池と考えられる方形の掘り込みによって破壊されている。



豎穴住居跡001Aは、南側を001Bによって破壊されており、北側の一部を調査することができた平面方形の豎穴住居跡である。方位はN-65°-Wをもつ。床面までの深さは約10cmで、上部は後世の耕作等による削平を受けていると考えられる。一辺5~6mに復元できる。主柱穴はP2・4・6となると考えられる。床面には、一面に炭・焼土・炭化材が検出された。炭化材は多くが放射状に検出されしており、落下した垂木材と思われる。なお、周辺では焼土が検出されており、屋根に土が置かれていた可能性がある。また、壁溝部分でも炭化材が検出されている。外側から内側に倒れ込むような検出状況が確認できるものもあり、壁溝に沿って板材が建てられていた可能性がある。壁溝北西部で、溝内に落ち込むように手培形土器の1個体（第19図1）がつぶれた状態で検出された。住居内から出土した唯一の完形土器で、住居の廃棄の際に住居の隅に置かれたと想像される。

豎穴住居跡001Bは、001Aをほぼ同じ場所で建替えた平面方形の住居と思われる。ただし、方位はN-20°-Wと大きく異なっている。001Aより10cm程度深く掘り込まれ、床面を作っている。主柱穴はP1・3・5・7で、炉跡と考えられる中央土坑と南西辺中央部分で出入り口部分になると思われる土坑が検出された。この土坑付近から南西の住居外へのびる溝が検出されている。住居の排水溝であろうか。南東部分では方形に突出する区画があり、南側に拡張されている。この住居跡でも北側でも、炭化材等が検出されている。また、南側でも焼土や炭が検出されており、住居全体に火を受けたことがわかる。ただし、土器は小片の出土が多く、完形近く復元できたのは北西部の床面で出土した甕1個体（第19図2）にとどまる。

### 豎穴住居跡002

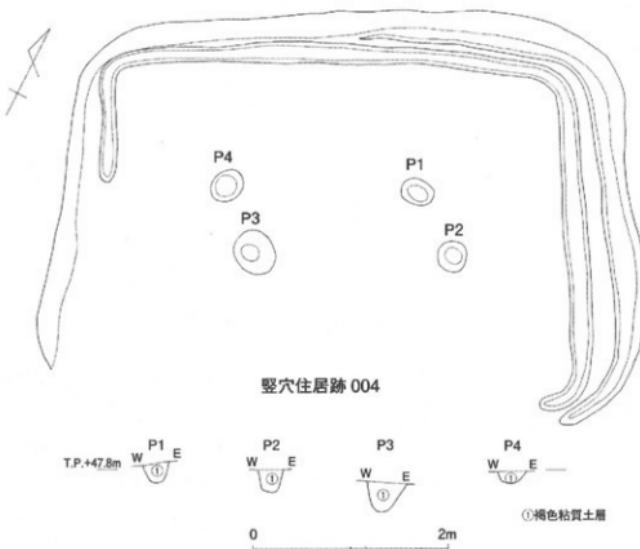
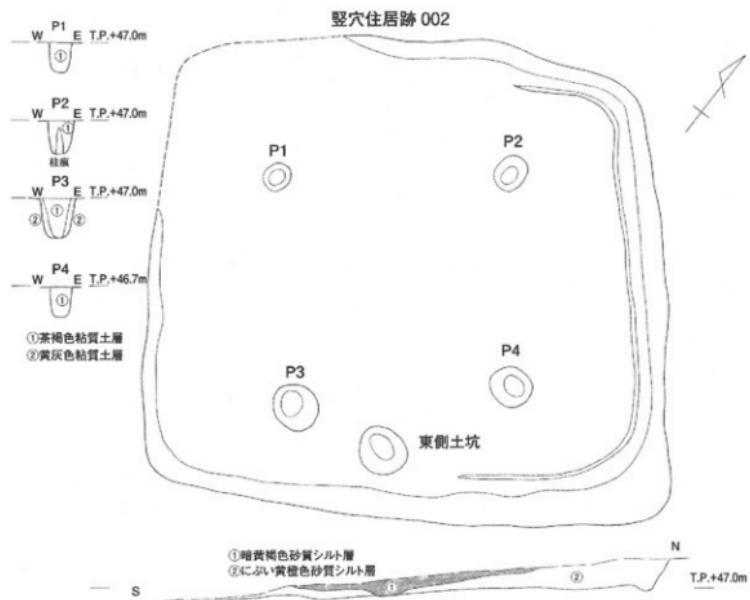
豎穴住居跡001の南側の丘陵縁辺部で検出した、平面方形の豎穴住居跡である。現状では周辺は緩斜面となっており、北側では床面まで30cmの深さがあるが、南側は土砂が大きく流失しており、壁や床面の一部が失われている。この住居跡も試掘・確認調査B調査区にかかっていたのだが、当初は自然地形の落ち込みと誤認し、本発掘調査によって豎穴住居跡であることを確認した。

検出時には、中央付近を中心に黒色の腐植土層が堆積していた。これは、後述する豎穴住居跡003などでも認められ、住居廃絶後に埋め戻されず放置されて、中央が長期にわたって凹地状に残ったために形成されたと考えられる。一辺約5mで、床面で4個の主柱穴と、南壁の中央部の出入り口と考えられる部分で浅い土坑を検出した。炉となるような中央土坑については、検出できなかった。埋土内より土器が出土している（第19図6~13）が、小型の鉢を除くと完形に復元できる土器はない。

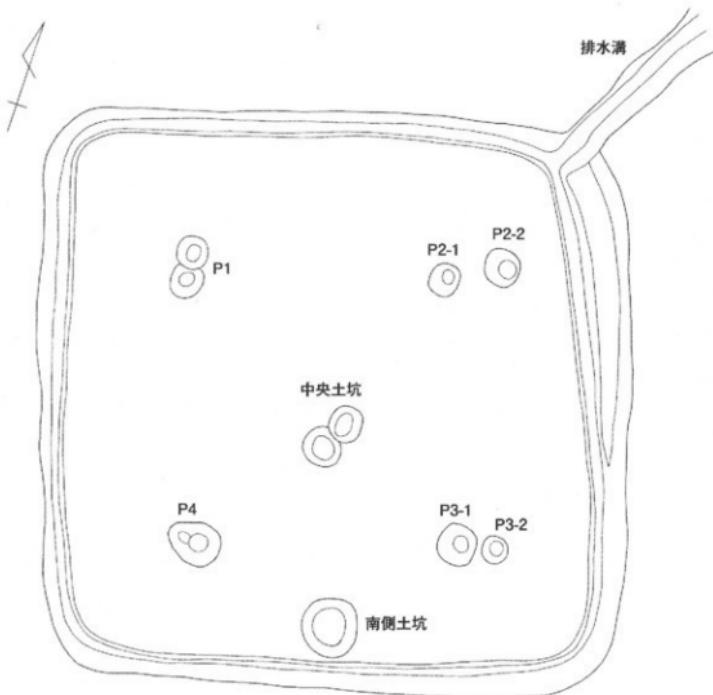
### 豎穴住居跡003

調査区中央の北寄りの平坦部で検出された、豎穴住居跡である。今回の調査で一番良好な状態で遺存していた豎穴住居跡で、重機による表土除去の段階で住居の輪郭が明瞭に検出できた。この住居跡も豎穴住居002同様に、検出時に中央部で直径約4mの黒色の腐植土層の堆積を確認し、この住居も廃絶後に埋め戻されず放置されたと判断される。

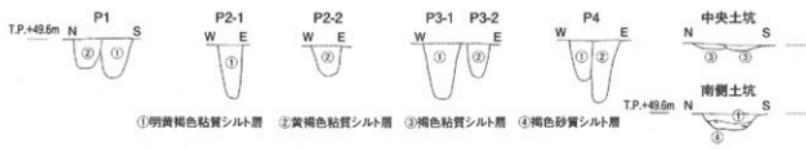
一辺約6mの平面方形の豎穴住居で、壁際には壁溝が巡る。北西角から北側の谷部に向ってのびる溝を検出しており、住居内の壁溝とつながっていることから、排水溝と推定される。なお、この溝は北側



第11図 竪穴住居跡002・004実測図 (S = 1/50)



①黒褐色粘質土層 ②にじむ黄褐色粘質土層



0 2m

第12図 堅穴住居跡003実測図 (S = 1/50)



第13図 竪穴住居跡005実測図( $S=1/50$ )

で2本に分岐しているが、後述するように住居の建替えに伴って、掘り直されたと思われる。2本の溝の先後関係については確認できなかった。検出面から床面までの深さは約20cmで、四隅に2個ずつの柱穴と中央に2個の炉跡と考えられる浅い土坑を検出した。以上の事実から、ほぼ同じ位置で建替えを行っていたことが判明した。西側ではほぼ同じ位置で柱穴があるのに、東側では2個の柱穴は40~50cm離れている。また、東側の壁と塗溝も少しずれている。上記の建替えの際に、東側に若干の拡張が行われたためだと考えられる。なお南側壁中央付近の床面で浅い土坑が検出されており、この部分が出入口と推測されるが、この土坑は掘り直されておらず、出入口はほぼ同じ位置で建替えが行われたことがわかる。

床面が良好な状態で検出されたにもかかわらず、南側土坑でまとまって出土した(第19図14~16)以外は土器の出土は少ない。

#### 竪穴住居跡004

調査区南西の丘陵端部で検出された、今回の調査では唯一の平面長方形の竪穴住居跡である。丘陵緩斜面部分に設定したトレーナーで土器の出土する落ち込みを検出し、その後周囲を広げて竪穴住居跡であることを確認した。この住居も、竪穴住居跡002同様に北の丘陵尾根側では検出面から床面まで30cm以上の深さがあるのに、南の谷側では土砂の流出によって床面も破壊されて塗溝等の遺構が失われている。

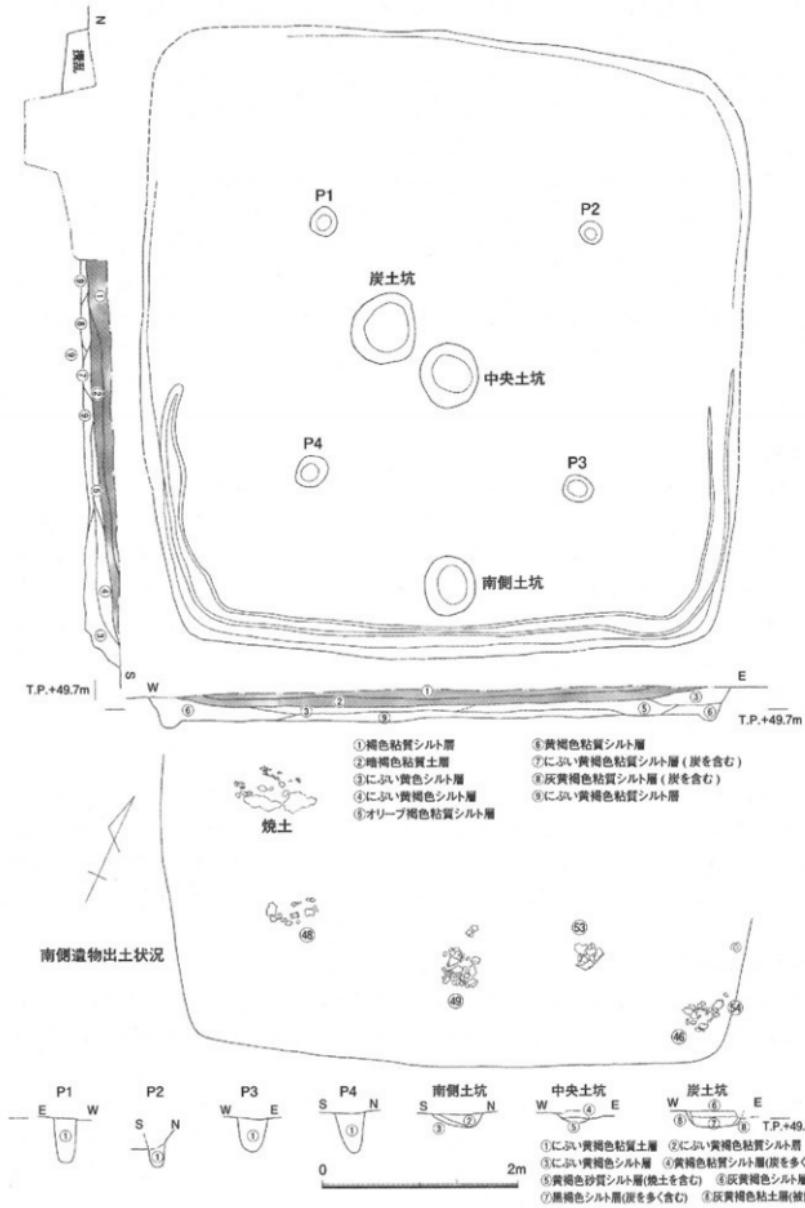
当初は他の竪穴住居跡同様に平面方形の竪穴住居を想定して調査を開始したが、東側壁溝の形状や柱穴より、平面長方形で主柱穴が2本の竪穴住居であると判断した。東側で壁溝が二重になっていることや、主柱穴が2個ずつ検出されていることから、東側へ若干の拡張を行った建替えが行われたと推測される。なお中央から南側は、土砂の流出によって床面が削平されたためか、中央土坑等浅い遺構は検出できなかった。

埋土内からは、匙形土製品(第22図)や、完形品の小型直口壺(第19図18)・器台(同26)をはじめ、多くの土器が出土した。ただし、遺物は床面よりも高い位置、つまり浮いた状態で検出している。

#### 竪穴住居跡005

調査区中央の丘陵尾根上の平坦部で検出された、平面方形の竪穴住居跡である。試掘・確認調査で丘陵中央の東西に設定したE2調査区で検出され、本調査によって全容が判明した。南側は近世以降の井戸や畑や竹林に伴う区画溝(排水溝)によって大きく破壊を受けている。

一辺5.5~6.0mの平面方形の竪穴住居跡である。内部を掘り下げていく途中で、北及び西側で壁から約1.0mの幅で床面より一段高い、いわゆるベッド状遺構があることを確認した。ただし、上記のとおり、南側は後世の破壊を受けており、その確認ができなかった。本来は東側の出入口を除く北~西~南の「コ」の字状に巡っていたと復元できる。ベッド状遺構は床面より約10cmの高さがあり、断ち割って断面土層を確認した結果、住居の床面掘削時に掘り残したのではなく、床面掘削後に盛土を行って成形したことを見出された。なお、断面土層観察の結果、掘り込んで形成した床面となる地山層の直上に薄いシルト層の堆積が部分的に認められ、その上面から中央土坑が掘られており、張り床を施していたこと



第14図 堪穴住居跡006実測図 (S = 1/50)

が判明した。床面では4個の柱穴と炉跡と考えられる中央土坑及び東壁中央付近の出入口と思われる部分で土坑を検出している。柱穴や土坑から大規模な建替えは行われなかつたと判断されるが、南西部では縫溝が二重となる部分があり、南側の壁の修理に伴う小規模な拡張が行われたと推測される。南側壁から南に延びる排水溝を検出している。遺構面の削平のため南側の端は検出できなかつたが、南側の谷部分まで達していれば、総延長20mを超えていたであろう。

竪穴住居跡検出時に北側を中心に部分的に灰・炭・焼土の広がりや炭化材を検出した。竪穴住居跡001同様に火を受けたと考えられる。なお、北側のベッド状遺構の壁面部分で板状の炭化材を検出しておらず、盛土によるベッド状遺構の保護のために何らかの施設があったことが想定される。床面では多くの土器（第20図32～44）が検出されており、完形に復元できたものが多く、住居廃絶時に置かれていたと推測される。南西隅では壺2個体（第20図32・33）、壺（同40）及び小型鉢1個体（同34）が検出されており、また東側の出入口付近でも壺上半部（同39）及び小型鉢2個体（同35・36）が検出されている。

### 竪穴住居跡006

調査区北西端部で検出された、平面方形の竪穴住居跡である。北側は丘陵端部に沿って掘られている後世の溝による破壊を受け、また内部にも後世の溜池等が掘られている。竪穴住居跡003同様にこの住居でも検出時に遺構中央部分を中心に黒褐色の腐植土の堆積が認められた。遺構面精査による平面での遺構輪郭の検出は進まず、サブトレンチを設定して壁面を確認して全容の把握を行った。

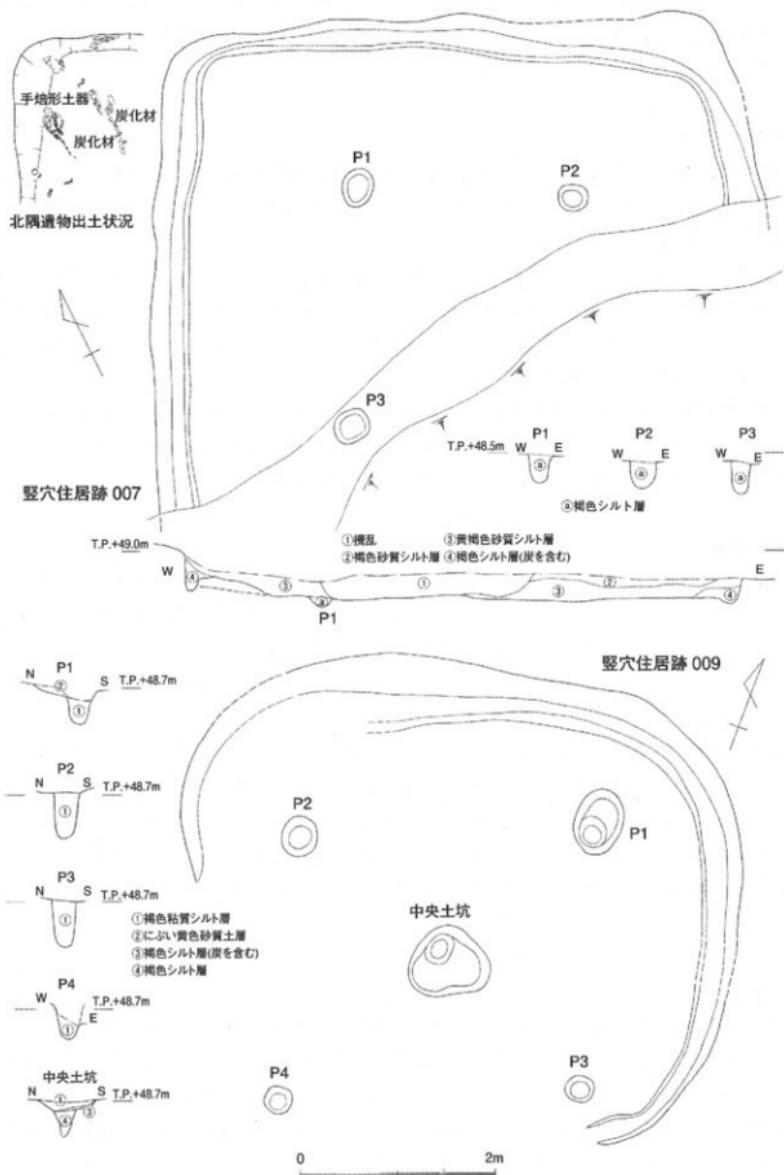
一辺約6.0mの平面方形の竪穴住居跡で、深さは30cmをはかる。断面観察の結果、竪穴住居跡005同様に張り床が認められた。床面では4個の柱穴と、中央部分で炉と考えられる浅い土坑、南側壁際中央部分で土坑を検出している。なお、中央土坑は2基が重なっていることが断面観察で確認され、作り替えが行われている。南側では住居床面上でまとまって土器が出土している。また、炭・焼土の集中する部分も検出された。

中央部の西寄りで後述する土坑003と同様の壁面が焼けて炭を多く含む埋土の土坑が検出された。当初は炉と考えたが、他の竪穴住居跡と異なることから上記の中央土坑を炉と考える。また、土坑003同様に弥生時代の遺構であるかも疑問である。床面で検出したのであるが、上部は土坑埋土と似た色調の上記の黒褐色土が堆積していたため、遺構の検出ができなかつた可能性がある。

### 竪穴住居跡007

調査区中央の丘陵南側端部で検出された、平面方形の竪穴住居跡である。南側半分は土砂の流出によって失われており、柱穴1基が検出できなかつた。また、樹木の根によって北側壁の一部も破壊されている。

遺存している部分により、一辺約6mの平面方形の竪穴住居跡に復元される。残りの良い北隅部分では、床面まで50cmの深さがあった。床面では3基の柱穴を検出しておらず、本来4本柱であったと推定される。遺構の状況から、建替えは行われなかつたと判断できる。遺構の遺存状況は良好でなかつたが、北隅部分では炭化材が多く検出されており、竪穴住居跡001・005・008同様に火を受けたと推



第15図 竪穴住居跡007・009実測図 (S = 1/50)

定される。この部分で垂木と思われる炭化材の下で、手焙形土器1個体分の破片（第21図60）が出土しており、堅穴住居跡001A同様に意識的に置かれたものかも知れない。遺構の遺存状態が悪かったためか、この土器以外の遺物の出土はわずかである。

### 堅穴住居跡008

調査区の西側の古墳南側で検出された、平面方形の堅穴住居跡である。丘陵南側端部に近く、丘陵南側で検出された他の堅穴住居跡同様に、土砂の流出によって南側の壁等が失われている。また樹木の根によって南側が破壊されている。

一辺約6mの平面方形の堅穴住居跡で、遺存状態の良好な北側部分で床面まで40cmの深さがあった。北側部分を中心に、炭化した建築材を含むをふくむ炭・灰・焼土が検出され、この住居も火を受けたと判断される。炭部分を良く観察すると草本類の茎と思われるものが確認でき、屋根に葺かれたカヤのようなものではないかと考えられる。

床面では四隅に2基ずつの柱穴が検出され、建替えが1度行われたことが判明した。この住居でも、床面を掘り込んだ後に張り床を行っていることが、断面観察の結果判明した。炭化材等が良く残っていたにもかかわらず、土器の出土は少なく、数点の破片（第21図63・64）にとどまる。

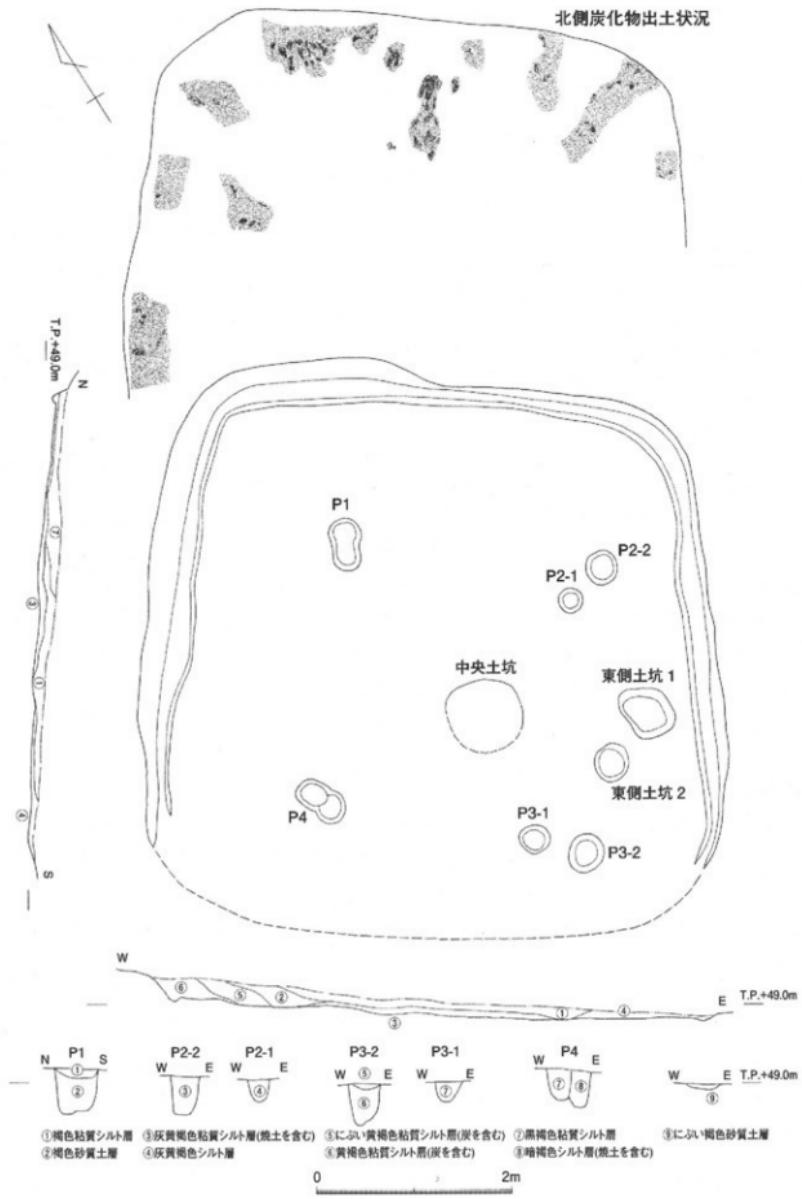
### 堅穴住居跡009

調査区南西部部分で検出された、平面方形の堅穴住居跡である。この住居も、丘陵南側で検出された他の住居同様に、現状では土砂の流出のため緩斜面となっており、尾根側の部分では約30cmの深さが残っていたが、谷側では床面も失われて壁溝等の遺構も検出できなかった。また、南西部分は木の根によって破壊されていた。試掘・確認調査D調査区の調査時に、一部が検出され、堅穴住居跡であることが認識され、その後の丘陵上全面の発掘調査によって、全容が判明した。

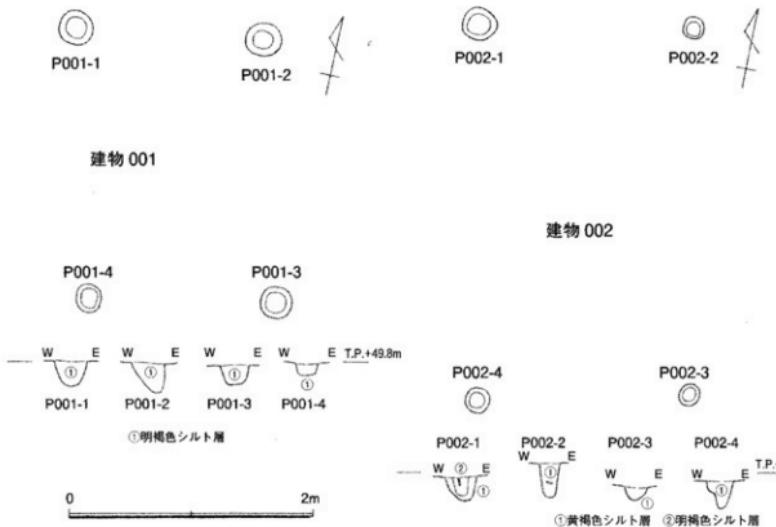
四隅に柱穴をもつ平面方形の堅穴住居跡で、一辺約6mの規模に復元できる。中央で炉跡と考えられる土坑を検出したが、他の堅穴住居跡で認められた出入口部分の土坑は、土砂の流出によって失われたためか、検出できなかった。遺構の状況から、建替えは行われていないと判断される。上記のように遺構の遺存状況は良好ではなかったが、試掘・確認調査時や北側部分では若干の炭化材が出土しており、住居廃絶時に火を受けたと考えられる。埋土内より、比較的多くの土器（第21図65～74）が出土している。

### 掘立柱建物跡

2008年度調査区では、柱穴となるような小ピットを数箇所で検出している。いくつかのものからは埋土内より弥生土器の小片が出土しており、上記の堅穴住居跡と同時期のものと推定される。この中で掘立柱建物に復元できたのは、2棟のみである。いずれの建物も1間×1間の小規模なもので、小型の高床倉庫に復元できよう。この他にも数箇所で柱穴がまとまって見つかっている部分があり、復元した2棟以外にも小規模な小屋が数棟存在したと推測される。



第16図 堅穴住居跡008実測図 (S = 1/50)



第17図 建物001・002実測図(S=1/40)

### 建物001

竪穴住居跡003の西側の、丘陵尾根上の平坦部で検出された。梁間1間×桁行1間の掘立柱建物である。梁間は1.5m、桁行は2.0mで、床面積3mに復元できる小規模な建物である。柱穴は、直徑で20~30cm、深さは10~25cmをはかる。本来の深さはもう少しあったと思われるが、後世の削平によって浅くなっていると推測される。

### 建物002

竪穴住居跡005の西側の、丘陵中央の平坦部で検出された。試掘・確認調査のE-2調査区の調査時に検出され、壁際で検出された柱穴P002-2を除くと、機械掘削によって上部が削平されて浅くなっている。本来はP002-2同様に40cm以上の深さがあったと考えられる。復元されるのは、建物001と同じ梁間1間×桁行1間の小規模な掘立柱建物である。梁間は1.7m、桁行は3.0mで、床面積5.1m<sup>2</sup>に復元できる。

### 土坑

2008年度調査区では、多数の土坑を検出した。しかし、その形状や埋土の状況から多くは、樹木の根の痕と考えられる。遺物が出土し、確実に遺構と考えられるものについて、報告を行いたい。

### **土坑003**

調査区東南部で検出された、平面長方形の土坑である。長辺1.1m、短辺0.9m、深さ30cmをはかる。灰・炭を多く含む埋土で、特に底部付近は炭を充填している。壁面は、被熱のため変色し、焼土化している。ただし、底面は熱を受けていない。

埋土中より土器等の遺物は出土しておらず、時期等は不明である。当初は、周辺の遺構同様に弥生時代（後期）の遺構と考えていたが、古代以降の火葬墓の可能性もある。

### **土坑004**

調査区東南部の土坑004の南側に隣接して検出された、平面長方形の土坑である。長辺2.1m、短辺0.94m、深さ20cmをはかる。埋土中より多くの土器片が出土しており、特に南側で集中して出土している。出土土器で完形に復元できるものは無く、壊れた土器を廃棄したと推定される。

### **土坑005**

調査区東側中央で検出された、平面卵形の土坑である。長径2.5m、短径1.8m、深さ18cmをはかる。埋土中より、多くの土器片が出土している。出土土器で完形に復元できるものは無く、壊れた土器を廃棄したと推定される。

### **土坑006**

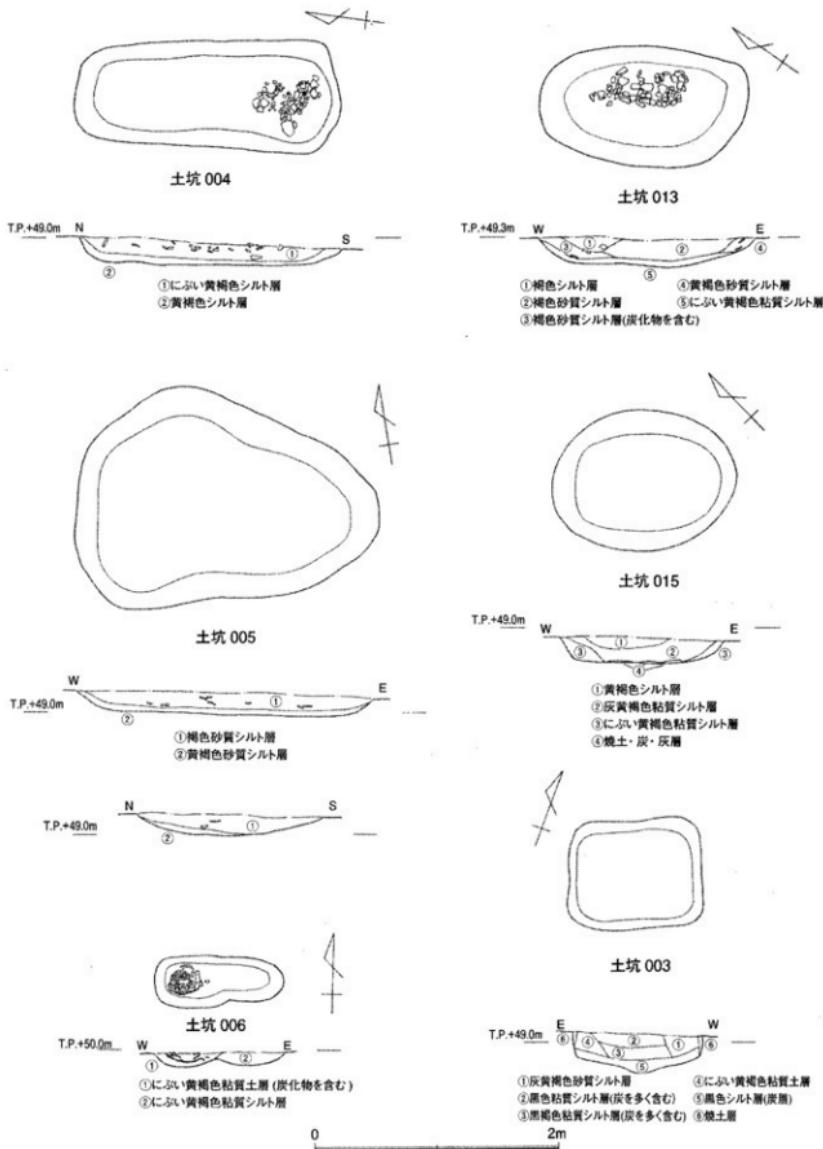
調査区中央の建物002の北側で検出された平面長円形の小さな土坑である。深さは10cmと浅く、上部は大きく削平されていると推定される。検出時は一つの遺構として調査を進めたが、断面観察の結果、東西二つの土坑が重なっていることが判明した。西側の土坑ではほぼ完形の壺1個体（第22図87）がつぶれた状態で出土している。土器の埋納を目的に掘削されたと推測され、土器棺墓等の特殊な性格の土坑と考えられる。

### **土坑013**

調査区東側中央の土坑005の北西で検出された平面長円形の土坑である。長径1.7m、短径1.0m、深さ20cmをはかる。埋土中より、多くの土器（第22図90～94）が出土した。出土土器で完形に復元できるものは無く、壊れた土器を廃棄したと推定される。

### **土坑015**

調査区中央の竪穴住居跡005の北側で検出された、平面長円形の土坑である。長径1.5m、短径1.15m、深さ20cmをはかる。底面では炭・灰が広く堆積しており、その上面で小型の長頸壺の完形品（第22図88）が出土した。南側で検出された竪穴住居跡005でも床面より広く炭・灰・焼土が検出されており、両遺構はなんらかの関係があると思われる。



第18図 2008年度調査区土坑実測図 (S = 1/40)

## 2 出土した遺物

### (1) 弥生時代の遺物

弥生土器（第19～22図）

#### 竪穴住居跡001出土土器（1～5）

手焙形土器（1）は、001Aの壁際（壁溝上部）で出土したほぼ完形品。小さく突出する底部から椭形に広がる鉢部の上部に覆部を継ぎ足す。覆部は口縁端部に載った状態であるが、接合部分には貼付突帯が巡り突带上には刻み目が施されている。鉢部下半部にも刻み目を施した突帯が巡る。覆部の外面はハケメ調整の上から荒いヘラミガキ調整が施されている。口縁部は受口状を呈する。しかし、琵琶湖周辺地域（近江型）の鉢形土器に見られる外面の文様は施されておらず無文である。

甕（2）は、外面にタタキ目が施されている。逆円錐台の胴部下半部から、球形の上部へと続く。口縁部は直線的に上方にのび、口縁端部は丸く收められる。

小型鉢（3）は内彎気味に立ち上がる口縁部をもつ。底部（4）は、壺形土器の底部。（5）は、外面にタタキ目が認められる甕の底部。（4・5）ともに内面にはクモの巣状のハケメ調整が施されている。

#### 竪穴住居跡002出土土器（6～13）

（6）は、壺の胴部破片。肩部に上部から櫛描直線文・同波状文・同直線文が施される。（7・11）は、手焙形土器。いずれも覆部の形状等は不明。（7）の鉢部は受口状口縁部であるが、無文である。（11）は、小型で外反する口縁部をもつ。鉢部には部分的にタタキ目が観察される。

（8）は高杯の口縁部。口縁端部は面をもつ。（9）は、受口状口縁部をもつ甕。（10）は、粗製の小型甕あるいは鉢。口縁部は波打っている。（12）は直口の小型鉢。（11）同様に口縁部は波打っている。（13）は碗形で直口の鉢。口縁端部は外傾する面をもつ。

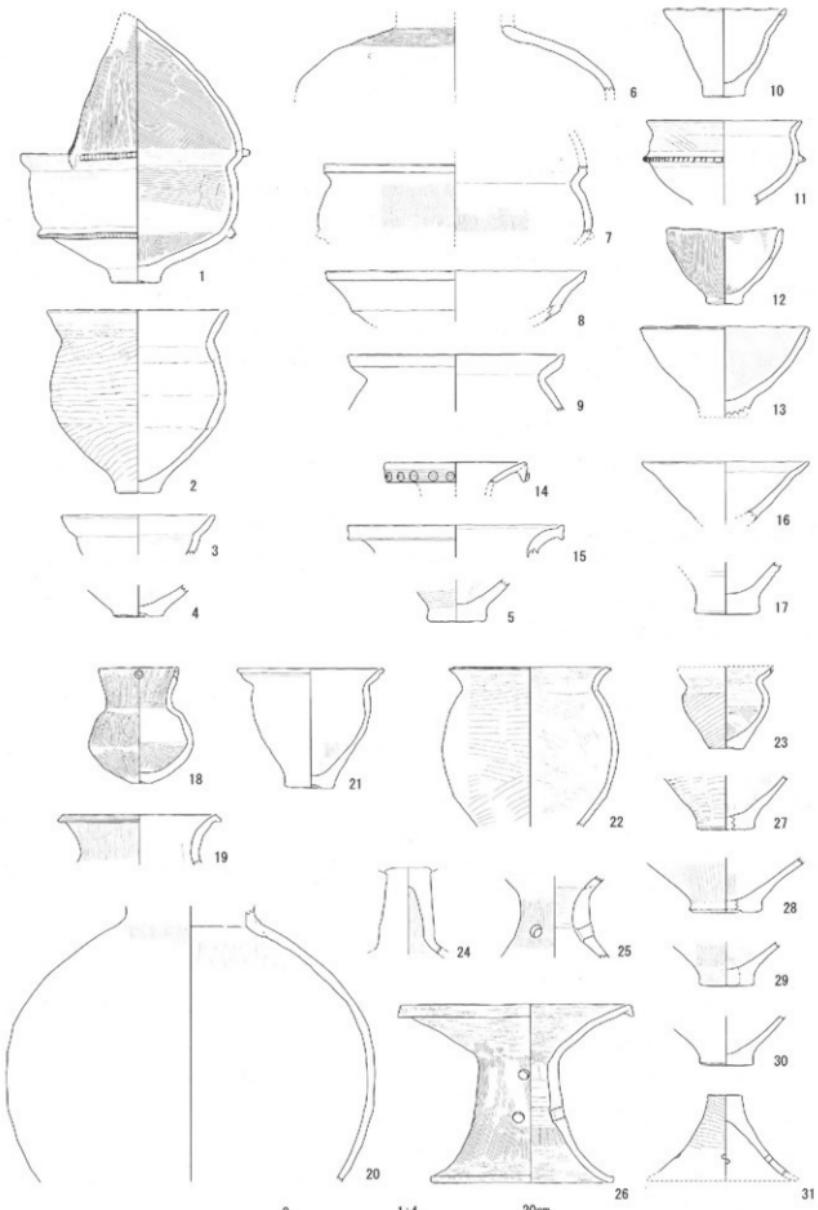
#### 竪穴住居跡003出土土器（14～17）

（14）は小型の壺の口縁部。垂下口縁で、口縁端面には3条の沈線文を施した後、竹管文を施した円形浮文を貼り付ける。（15）も壺の口縁部。端部はナデ調整により上下に肥厚し面をもつ。（16）は大きく広がる鉢。（17）は甕の底部。

#### 竪穴住居跡004出土土器（18～31）

（18）は小型の直口壺。球形の胴部からほぼ上方にのびる頸部～口縁部をもつ。口縁部に1箇所小円孔が穿たれている。底部は小さく凹んでいる。外面は細かいヘラミガキ調整が施されている。（19）は、短く外反する壺の口縁部。（20）は壺の体部。器面は摩滅により観察が困難であるが、上部にヘラミガキが認められる。褐色で胎土中には角閃石が含まれる生駒西麓産土器である。

（21）は小型の甕。外面はナデ調整が施される。（22）の甕は外面にタタキ目が認められる。（23）の甕も右上がりのタタキ目が観察できる。口縁部の一部を欠くがほぼ完形品である。大きさからミニチュア土器と推定される。



第19図 弥生土器実測図(1)

(24) は、高杯の脚柱部。裾部は大きく広がると思われる。(25) は器台の体部で、円形の透孔が穿たれている。

器台(26)は、ほぼ完形に復元できた。中空の体部から緩やかに広がる裾部に、大きく広がる口縁部をもつ。体部には4方向に円形透孔が穿たれるが、1箇所は上下2段に穿たれている。体部外面は縱方向に、口縁部と裾部は横方向にナデ調整が施されている。

(27~30)は底部の破片である。(27)は外面にタタキ目が認められ、壺の底部と思われる。(28・29)は外面にハラミガキ調整が観察され、壺の底部であろう。

(31)は円錐形の土製品で、裾部の一部を欠く。上部にはタタキ目が観察され、裾部に近い部分に4方向に小円形の透孔が穿たれる。蓋であろうか。

#### 豎穴住居跡005出土土器 (32~44)

壺(32~34)は、住居跡の南西隅の床面で出土した完形品である。(32・33)は中形品で、体部中位に最大径をもち、外反する口縁部をもつ。体部外面はタタキ目が認められるが、上部・中位・下部でタタキ目方向が異なる。内面はハケメ調整が施される。(34)は小型品で、作りは粗雑で、いびつな形で歪んでいる。

(35・36)は、住居跡の東側中央(出入口付近)で出土した、小型の直口の鉢。いずれも外面はナデ調整を施す。(35)は口縁部が波打っている。

(38~40・44)は、壺である。(38)は受口状を呈しており、琵琶湖周辺地域に分布するいわゆる近江系土器に類似する。(39・40)は、頸部～口縁部が大きく外反する広口壺である。口縁端部は丸く仕上げられている。(39)は頸部と体部の境に列点文が巡る。また、体部上位には、焼成後に円形の孔が穿たれている。(44)は突出する底部をもつ体部下位の破片である。

(37)は高杯の脚柱部である。中実で大きく広がる裾部となると思われる。

(41~43)は底部の破片。(41・42)は外面にタタキ目が認められ壺の底部、(43)は壺の底部と考えられる。胎土中に角閃石を含み、褐色を呈する生駒西麓産土器である。

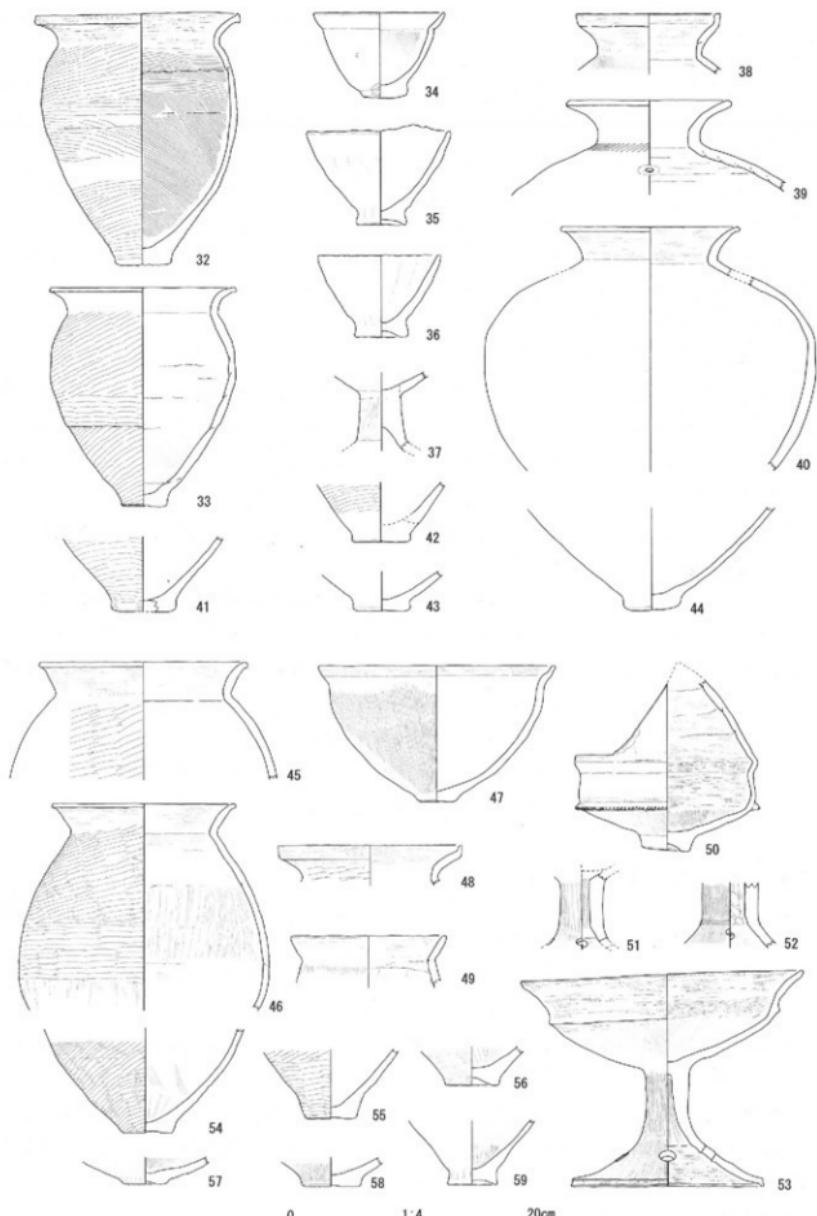
#### 豎穴住居跡006出土土器 (45~59)

壺(45・46)は、口縁部の外反度が豎穴住居跡005出土品と比較すると小さくなる。(46)は、体部最大径が中位より下がった位置にあり、(45)も同様になると思われる。

(47)は、鉢である。大きく内彎する体部に、やや受口状に短く伸びる口縁部がつく。底部は小さく突出する。体部外面には、縱方向に細かいハラミガキ調整が施される。

(48)は受口状の口縁部の破片。頸部外面にはタタキ目が認められる。(49)は外傾気味に伸びる口縁部で、小型の壺であろう。

手焙形土器(50)は、受口状の鉢に覆部がつく。鉢と覆部の接合は、鉢口縁部に覆部が載った状態である。体部下位には貼付突帯が巡り、壺部にはキザミ目が施される。底部は大きく突出し、上げ底状となっているが、歪んでいる。体部下位は、内外面ともハラミガキ調整、その他の部分はナデ及びハケ目調整である。



第20図 弥生土器実測図(2)

高杯の脚柱部(51・52)は中空で、外面はヘラミガキ調整が施される。裾部には透孔がある。(52)は裾部との境に4条の沈線が巡っている。

高杯(53)は今回の調査で完形に復元された唯一のものである。杯部は口縁部が大きく外反する形状で、屈曲部は下方に突出する。口縁部は横方向のナデ調整、下部はヘラミガキ調整が施される。脚部は細い中空の柱状部から大きく広がる裾部をもつ。外面はヘラミガキ調整。裾部上位に、4方向に円形の透孔が穿たれる。

(54~59)は、底部の破片である。(54~56)は壺、(57・58)は壺、(59)は鉢のそれぞれ底部となろう。(54・57)のように、底部が小さくなっているものがある。

#### 豊穴住居跡007出土土器 (60~62)

手焙形土器(60)は、住居跡北西隅で炭化材と一緒に出土した。実測図では完形品に復元できた。受口状の口縁部をもつ鉢部に、覆部がつく。鉢部と覆部の接合部分は、他の手焙形土器同様に鉢口縁部上に覆部が載る形状である。体部下位には、断面台形の貼付突帯が巡る。器表面は摩滅が著しく、調整は不明である。

(61)は壺の底部～体部の破片、(62)は底部の破片である。

#### 豊穴住居跡008出土土器 (63・64)

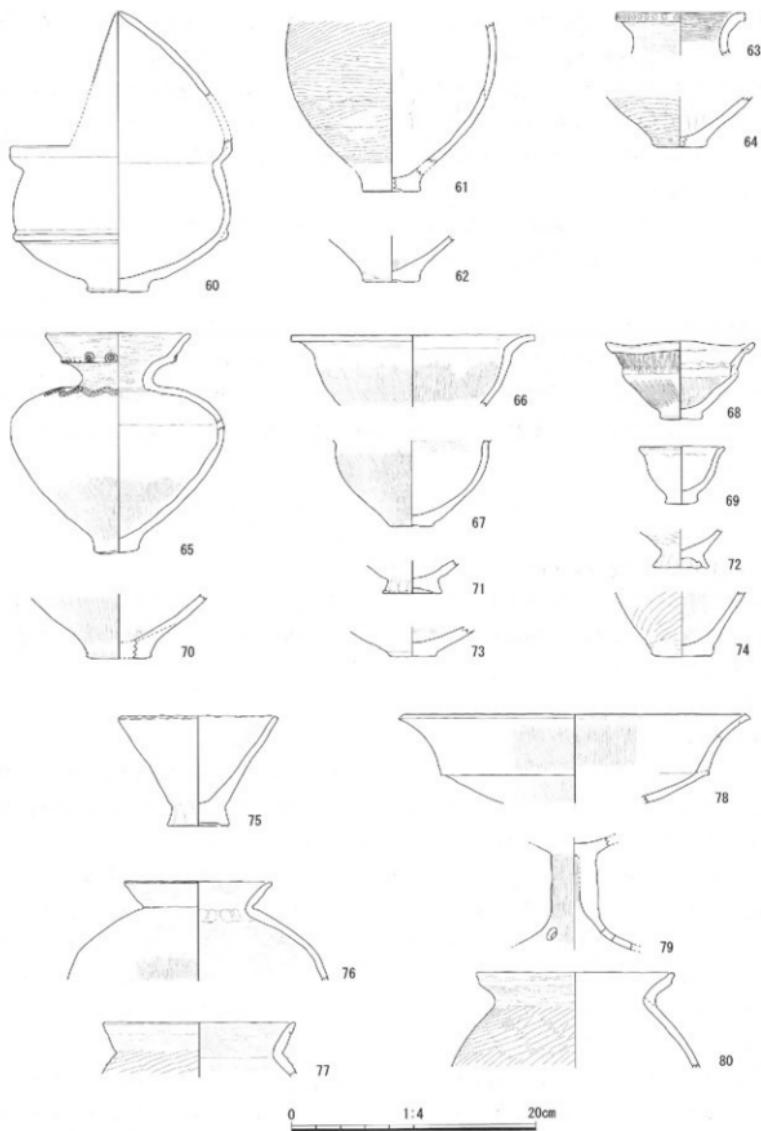
床面で灰や炭化材が広く認められた住居跡であるが、出土土器は僅かで、図化できたものは少ない。(63)は壺の口縁部の破片で、口縁端部は面をもち、竹管文が施されている。(64)は底部で、外面にはタタキ目が認められる。

#### 豊穴住居跡009出土土器 (65~74)

二重口縁壺(65)は、突出する底部から肩部の張る無花果形の体部をもち、口縁部は屈曲して外側に大きく立ち上がる。口縁部の屈曲部にはキザミ目が施され、2個一組とした竹管文を施した円形浮文が貼り付けられる。体部下位の外面にはヘラミガキ調整が施される。

(66~69)は、鉢である。(66)は大きく外反する口縁部をもつ。体部は内外面とも縦方向のヘラミガキ調整が施される。(67)も球形の体部で外面には2段に縦方向のヘラミガキ調整が施される。口縁部を欠くが、(66)同様の外反するものであろう。(68)は小型品で、体部に比して大きめの外反する口縁部をもつ。口縁部は波状口縁のようになっている。内外面ともヘラミガキ調整が認められるが、かなり荒く施されている。(69)は、さらに小型のミニチュア土器。短く外反する口縁部をもつ。内外面ともナデ調整を施す。

(70~74)は、底部の破片である。(70)は外面にヘラミガキ調整が施される比較的大型の壺の底部であろう。(71・72)は小型の鉢の底部、(73)は壺あるいは中形の鉢の底部、(74)は、壺の底部と考えられる。



第21図 弥生土器実測図(3)

### **土坑004出土土器 (81~84)**

(81) は広口壺の口縁部の破片である。口縁端部は粘土紐を貼り付けて垂下口縁を呈し、キザミ目を施した後、竹管文を施した円形浮文を貼り付ける。内外面ともヘラミガキ調整が施される。

(82) は壺の体部の破片である。肩部には、櫛描直線文及び櫛描波状文が施されている。二重口縁壺の破片と考えられる。外面はヘラミガキ調整、内面はハケメ調整が施される。

(83) は、壺の体部である。小さく突出する底部から球形の体部をもつ。外面は風化のため観察が困難であるが、下位には縦方向のヘラミガキ調整が施される。内面は、ハケメ調整が施される。胎土中には角閃石を含み、暗褐色を呈する生駒西麓産土器である。

(84) は、鉢。比較的器壁の薄い作りで、半球形の体部から外傾気味に伸びる口縁部をもつ。

### **土坑005出土土器 (85・86)**

(85) は、図上で完形に復元できた壺である。球形の体部から直立する頸部をもち、口縁部は短く外反する。口縁端部は、面をもつ。体部と頸部の境には、キザミ目文が巡る。頸部～体部外面には縦方向のヘラミガキ調整、口縁部～頸部内面には横方向のヘラミガキ調整が施される。

(86) も、図上で完形に復元した壺である。口縁部は短く立ち上がり、受口状を呈する。体部外面は上位にはヘラミガキ調整が施されているが、下位にはタタキ目が認められる。胎土中に角閃石を含み、茶褐色を呈する生駒西麓産土器である。

### **土坑006出土土器**

(87) は、完形の壺。全体に歪な形状で、底部は中心よりはずれている。口縁部は直立気味に立ち上がり、わずかに外反する。外面は右上がりのタタキ目が施され、内面はハケメ調整が施される。

### **土坑011出土土器**

(89) は、高杯の脚部である。内面に絞り痕のある脚柱部から緩やかに広がる裾部をもつ。3方向に円形の透孔が穿たれる。外面はヘラミガキ調整を施す。

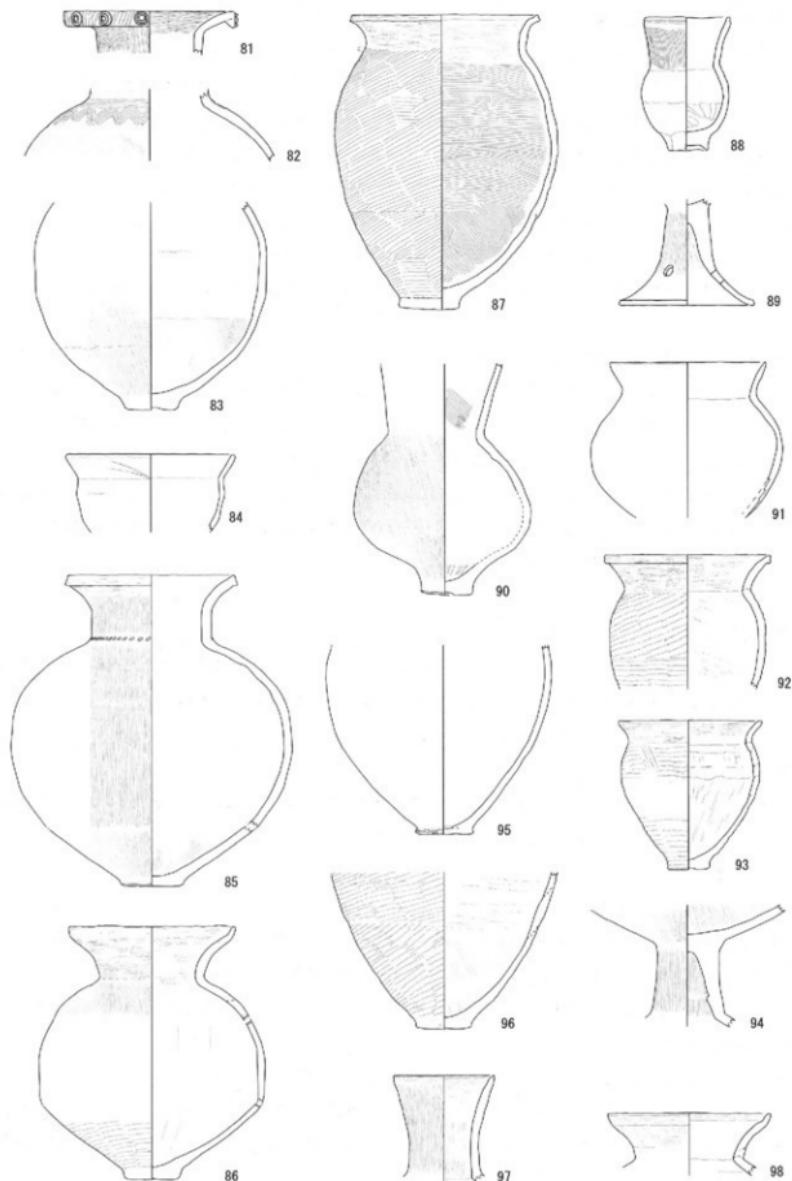
### **土坑013出土土器 (90~94)**

(90) は、口縁部を欠く長頸壺である。下膨れ気味の体部に、突出する底部をもつ。頸部は、上方に広がりながら伸びる。体部外面には、縦方向のヘラミガキ調整が施される。

(91) は、壺と思われる。球形の体部から直口気味に上方に伸びる口縁部をもつ。風化のため、内外面の調整は不明である。

(92) は壺。緩やかに外反する口縁部をもつ。体部外面にはタタキ目が認められる。

(93) は小型の壺。短く外反する口縁部をもつ。体部外面にはタタキ目が認められるが、中位部分はナデ調整により消されている。内面はナデ調整であるが、成形時の粘土帯の接合痕が明瞭に残る部分もある。



第22図 弥生土器実測図(4)

(94) は、高杯の杯部～脚部の破片である。脚部は内面に成形時の絞り痕の残るもので、大きく広がる裾部が付くと考えられる。杯部内外面及び脚部外面にはヘラミガキ調整が施される。

(95) は、壺の体部の破片と思われる。器面の風化のため、調整は不明である。

(96) は、壺の体部下半部である。不安定な小さな底部をもつ。外面にはタタキ目が認められ、内面はハケメ及びナデ調整が施される。

#### 土坑015出土土器 (88・97・98)

(88) は、完形品の小型の長頸壺である。頸部外面にはハケメ調整が施されている。

(97) は、細頸壺の頸部～口縁部である。外面には縱方向のヘラミガキ調整が施される。

(98) は、短く立ち上がり受口状を呈する口縁部の破片で、(86) 同様に壺の一部であろうか。

#### 土坑020出土土器

(75) は、逆円錐形をした直口の鉢である。粘土帶積み上げ時の擬口縁をそのまま口縁にしたように、口縁部は波打っている。内面にはハケメ調整が施される。

#### 土器溜出土土器

(78) は高杯の杯部。大きく外反する口縁部をもつ。屈曲部分は下方に突出する。内外面ともヘラミガキ調整が施される。

(79) は(78)と同一個体と思われる高杯の脚部である。僅かに中空となっている脚柱部から大きく広がる裾部をもつ。外面は縱方向のヘラミガキ調整を施す。

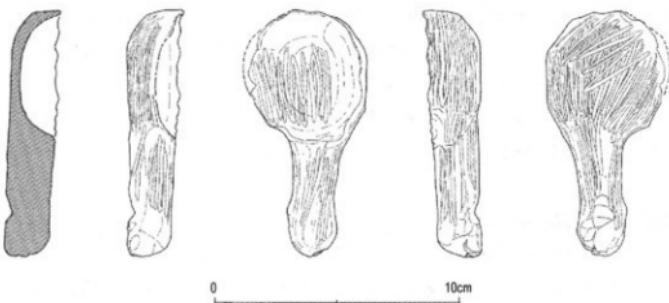
(80) は、受口気味の口縁部をもつ壺。体部外面は右上がりのタタキ目が認められ、口縁部外面は横方向のナデ調整を施す。

#### 調査区南西部斜面遺物包含層出土土器

(76) は、壺である。球形の体部から、短く立ち上がる口縁部をもつ。体部外面はヘラミガキ調整を施す。

(77) は壺である。直口気味に短く立ち上がる口縁部をもつ。体部外面にはタタキ目が認められる。

今回の発掘調査で出土した弥生土器は、その特徴より畿内第V様式(弥生時代後期)に位置づけられる。二重口縁壺(65)や手焙形土器(1・7・50・60)が含まれていることから、畿内第V様式でも後葉で理解できよう。体部が下膨れとなる壺(46)や、(18)のように底部が小さくなるもの、さらに(6・65・82)といった加飾(二重口縁)壺が含まれていることから、庄内式期に近い後期末と考えられる。



第23図 匙形土製品実測図 ( $S = 1/2$ )

#### 匙形土製品（第23図）

豎穴住居跡004の埋土中より出土した、ほぼ完成品である。半球形の体部に柄をもつ土製品である。全長は10.1cm、体部は直径5cm、深さ1.5cm、柄部の長さ5cm、直径1.8cmをはかる。体部は右側の縁が高くしっかり作っているが、左側は低くかなりいびつな作りとなっている。柄部の形状もいびつで、全体に粗雑な作りである。しかし、荒いが全面にヘラミガキ調整が施されており、ていねいに仕上げようとする意図もあったと思われる。焼成はやや軟質で、明茶褐色～暗赤褐色を呈する。全体の形状より実用品とは考えられず、特殊な用途をもった土製品と推測される。

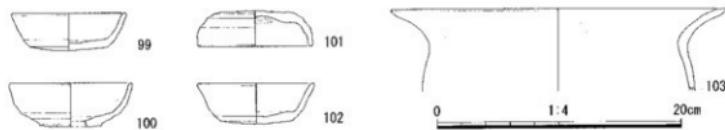
#### 石 器（図版32）

- (1) は、サスカイト製打製石鎌である。先端部を欠失する。全長2.2cm、最大幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.98g。両側縁は、細かい押圧剥離が施されている。土坑004上面で出土した。
- (2) は、削器と思われるサスカイト製剥片石器である。長さ4.1cm、幅4.0cm、厚さ0.9cm、重さ14.41g。右側縁に押圧剥離が施されている。豎穴住居跡006埋土中より出土した。
- (3)～(5) は、砥石である。(3)は最大長27cmの大型の砥石で、使用面は大きく凹んでいる。石の目は細かい。土坑012出土。(4)は小型の砥石で、長さ7.0cm、幅5.2cm、厚さ1.9cm。上面のみが使用されている。石の目は細かい。豎穴住居跡004埋土中より出土した。(5)は、小型の砥石の破片である。2面が砥石として使用されている。石の目は細かい。土坑004の埋土中より出土した。

#### （2）飛鳥時代の遺物

飛鳥時代の遺物は、2007年度調査区を中心に少量の土器が出土している。調査地は後世の削平を受けており、本来存在したはずの遺物包含層は残っておらず、遺物はいずれも遺構内から出土した。

(99) は、溝1出土の須恵器の壊身である。口径9.4cm、器高3.1cm。平坦な底部から外傾気味に伸びる口縁部をもつ。



第24図 飛鳥時代土器実測図

(100) も、溝1出土の須恵器の坏身である。口径10.0cm、器高3.7cm。やや突出気味の底部から内縫気味に伸びる口縁部をもつ。

(101) は、柱穴P206の埋土から出土した須恵器の坏蓋である。口径9.4cm、器高3.0cm。天井部は平坦に仕上げられ、内縫気味の口縁部をもつ。

(102) は、試掘調査時に北側の丘陵のK-1調査区で出土した須恵器の坏身である。口径9.7cm、器高3.4cm。(99) 同様に平坦な底部から外傾気味に上方に伸びる口縁部をもつ。

(103) は、土師器の甕の破片である。口径28.0cm、器面の風化が著しく、調整等は不明である。胎土は、石英・長石・チャート・雲母・赤色粒を含み、淡乳灰色を呈する。

以上、飛鳥時代の集落に伴う土器は少量であるが、須恵器坏の法量や、坏の身と蓋の形態から考えると、飛鳥II期に位置づけることができよう。東側の第二京阪道路調査地で検出されている建物等の遺構群で出土している土器と同時期と考えられる。

## 第V章　まとめ

今回の調査では、飛鳥時代と弥生時代の2つの時代の遺跡を調査することができた。以下、時代別に調査成果をまとめておきたい。

飛鳥時代の遺構は、古墳を除くと調査地東側の2007年度調査区に集中する。今回の調査では、2棟の掘立柱建物跡及び溝・土坑を検出した。東側に隣接する第二京阪道路建設に伴う発掘調査地では、掘立柱建物跡5棟及び竪穴住居跡2棟が検出されており、一連の遺構群として理解することができる。いずれもほぼ正方形を意識して建てられていることや、並んで建てられているものには柱通りをそろえるものがあることから、計画的な配置が行われていると言えよう。建物には建替による重複が無く、少量であるが出土土器の示す時期も7世紀中頃に限定されることから、短期間に営まれた建物群であったと考えられる。以上の事実より、寝屋南遺跡で検出された建物群については、一般的な集落というよりも、役所的な特殊な性格をもったものとして理解すべきではないかと考える。

西側の丘陵上で見つかった古墳は、横穴式の小石室をもつものである。周囲に残っていた周溝と考えられる凹みから、一辺9m程度の方墳と推定される。近世以降に丘陵上の開墾（溝の掘削）に伴って北東部分に破壊を受け、その後古墳上に塚が築かれて今日に至ったことが、調査によって判明した。この時の破壊以前に墳丘が遺存していたかは不明であるが、周辺では石室の天井石となるような石は認められず、墳丘はそれ以前にある程度失われていた可能性が高い。床面には棺台になると推定される4列の石列があり、木棺が埋められたと思われる。ただし、石室は狭小で木棺を入れると余裕は無いと思われる。なお、棺台に使用された石で、一列日のもので接合関係があることが判明した。横穴式石室の壁に使用された石材の残りを割って使用したと考えられ、石室構築を考えるうえでも興味深い資料である。残念ながら、石室内部から人骨・棺材・副葬品等の被葬者に関わる遺物は発見できず、被葬者像については不明である。このため、古墳の築造時期についても特定できないが、石室の構造等から7世紀以降に築造されたいわゆる終末期の古墳と考えられる。上記の調査地東側で検出された同時期の建物群との関係が想定される。

弥生時代の集落跡は、寝屋南遺跡では初めて検出された。標高約50mの丘陵上の平坦部で、竪穴住居跡9棟及び掘立柱建物跡2棟をはじめ、土坑や溝を検出している。概ね2008年度調査区の範囲の中で、弥生時代の遺構は見つかっている。東側の2007年度調査区との境界部分は丘陵が狭まっており、一方西側でも丘陵が狭まっていることを考えると、この間の東西約150mの範囲で集落が展開していたと思われる。

竪穴住居跡は、9棟検出されたが、建替え等が行われたものもあり、状況証拠によってその変遷を考えてみたい。竪穴住居跡の中でその方位に着目すると、N-60°~70°-Wとなる001A・005・007・008とN-15°~35°-Wとなる001B・002・003・004・006・009の2群に分かれる。この中で、001での遺構の重複による先後関係(001A→001B)を参考にすると、前者が古く、後者が新しいことがわかる。また、竪穴住居跡002・003・006の3棟では、遺構の検出時に住居中央部に直径2m程度の円形の黒色

腐植土層が認められた。この腐植土層は、遺構が完全に埋没せずに中央が凹地として残った部分に、その後の時間をかけた自然による堆積によって形成されたと考えられる。こうした特徴をもつ竪穴住居跡は、使用されなくなった後も埋め戻されずに放置されていたと想定される。つまり、これらは、集落廃絶時に存在した住居といえよう。こうした特徴のある竪穴住居跡3棟は、いずれも上記の検討で新しい一群に含まれている。以上の検討から、二つのグループは時期差であると結論でき、前者を1期、後者を2期と呼ぶことができよう。

さらに、2期の竪穴住居跡では、柱穴等から建替えの行われたものがあることなどを参考にすると、001B・003・004・009と002・003(建替後)・004(建替後)・006の2群に分けることができよう。このうち、後者はさきに検討したとおり、集落廃絶時の最終段階に存在したもので、前者はその前段階に存在したと推定できよう。そこで、2期とした竪穴住居跡にも大きく2時期に細分することができ、それぞれ2a期および2b期とする。以上の検討を整理すると、竪穴住居の変遷は下記のとおりとなる。概ね、竪穴住居4棟が一時期に存在した住居であったと考えられる。

1期 001A・005・007・008

2a期 001B・003・004・009

2b期 002・003(建替後)・004(建替後)・006

なお、住居内で炭化材をはじめ炭や灰が検出された竪穴住居跡は、001A・001B・005・007・008・009で、1期及び2a期のものに認められ、一方集落廃絶時の2b期の竪穴住居には認められない。つまり、住居に火をかける行為は、集落廃絶時ではなく集落存続時に行われたといえよう。つまり、集落存続時に使われなくなった住居を壊し、埋め戻して更地にする際に、火がつけられたと推測できる。竪穴住居跡001A及び007では、住居の隅(壁溝付近)でほぼ完形品の手培形土器が出土しており、廃棄した住居を埋め戻す際に、なんらかの祭祀行為が行われた可能性がある。

以上、各時期の調査成果をまとめたが、周辺での遺跡の発掘調査事例は少なく、実態が不明の遺跡も多い。今後、そうした遺跡の解明が進み、今回の調査成果と合わせて考えることによって、寝屋川市東部の地域の歴史の解明ができるものと考える。

# 報告書抄録

ふりがな ねやみなみいせき  
 書名 寝屋南遺跡  
 副書名 寝屋川地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書  
 卷次  
 シリーズ名 寝屋川市文化財資料  
 シリーズ番号 27  
 編著者名 漢田延充  
 編集機関 寝屋川市教育委員会  
 所在地 〒572-0036 大阪府寝屋川市池田西町24-5 TEL 072-838-0188  
 発年月日 西暦 2009.3.31

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			(m <sup>2</sup> )	

ねやみなみいせき 寝屋南遺跡	寝屋川市 ねやがわし 寝屋南2丁目	34°	135°	2008	8500m <sup>2</sup>	土地区画 整理事業
		45'	39'	24~		
		50"	00"	2009	3.31	

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寝屋南遺跡	集落遺跡	弥生時代	竪穴住居跡	弥生土器・石器	
			掘立柱建物	匙形土製品	
			土坑・溝		
	飛鳥時代		掘立柱建物	土師器・須恵器	
			土坑・溝		
			古墳		

# 写 真 図 版





a. 調査区全景（北西から）



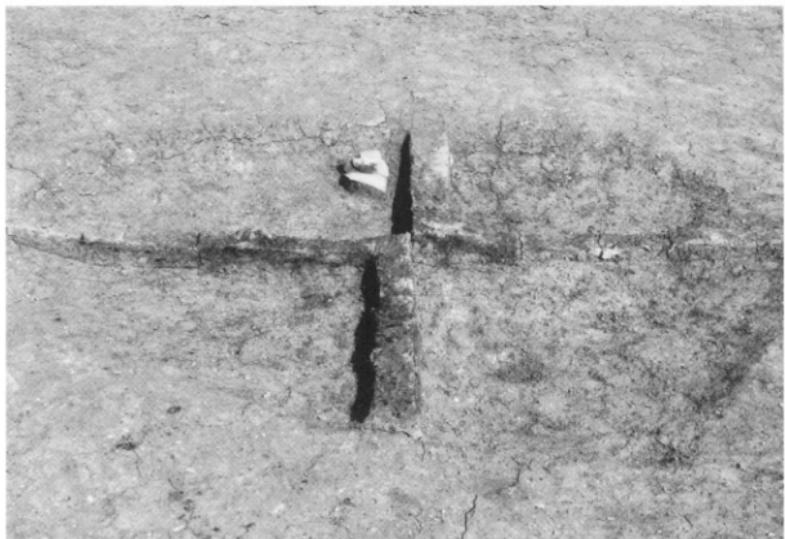
b. 同上（北東から）



a. 2007年度調査区 北側部分（南西から）



b. 2007年度調査区 南側部分 建物1・2（西から）



a. 2007年度調査区 土坑1（西から）



b. 2007年度調査区 溝1（北から）



a. 2008年度調査区 塚状造構樹木伐採後現況（北から）



b. 2008年度調査区 塚状造構表土除去状況（北から）



a. 2008年度調査区 塚状遺構盛土除去後土層断面（東から）



b. 2008年度調査区 塚状遺構下部古墳石室検出状況（東から）



a. 2008年度調査区 古墳石室内石材片出土状況（北から）



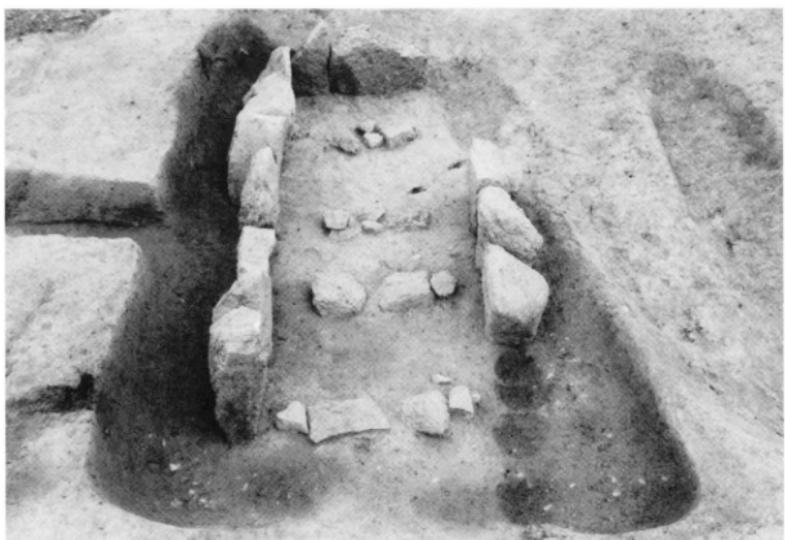
b. 2008年度調査区 古墳全景（南から）



a. 2008年度調査区 古墳石室床面検出状況（南東から）



b. 同上（南から）



a. 2008年度調査区 古墳主体部墓壙掘方完掘状況（南から）



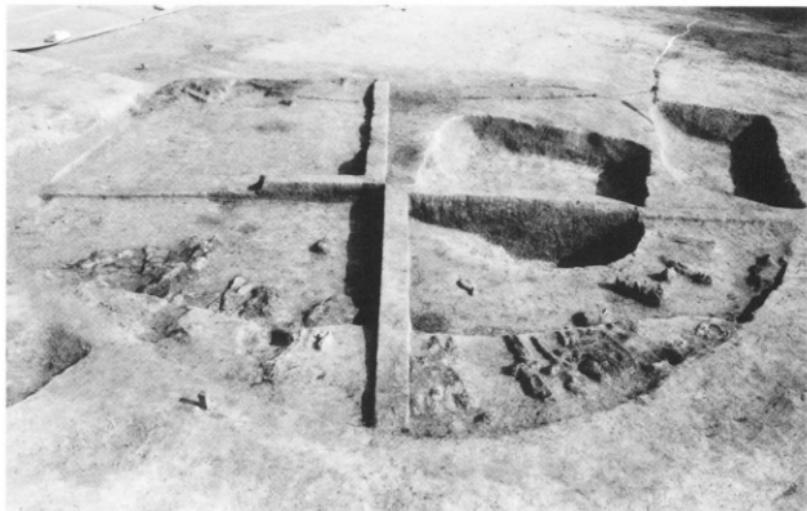
b. 2008年度調査区 古墳主体部石材除去状況（北から）



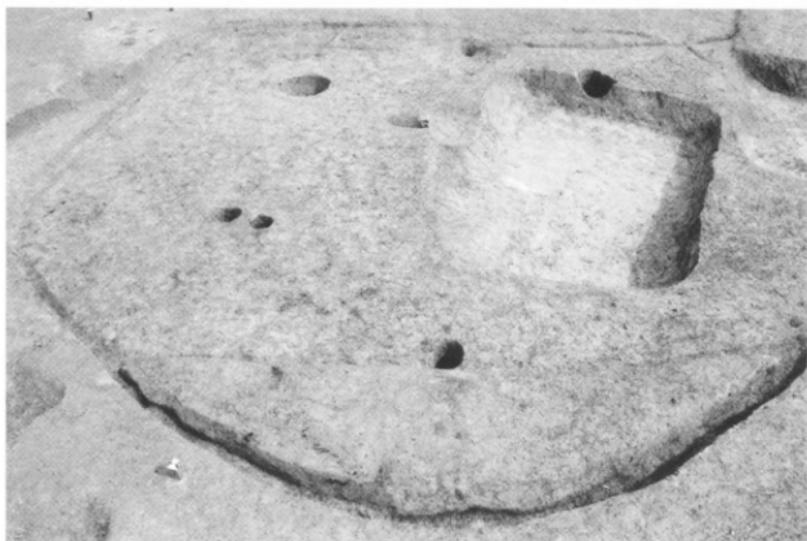
a. 2008年度調査区 竪穴住居跡001検出状況（北西から）



b. 同上（南東から）



a. 2008年度調査区 堪穴住居跡001炭化材等検出状況（北から）



b. 2008年度調査区 堪穴住居跡001完掘状況（北から）



a. 壁穴住居001A北側炭化材検出状況（西側部分・北から）

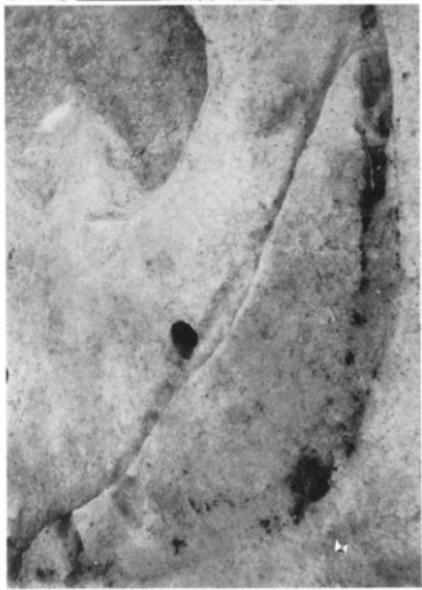


b. 壁穴住居001A北側炭化材検出状況（中央部分・北から）



c. 壁穴住居001B北側炭化材検出状況（東側部分・北から）

d. 壁穴住居001B南側焼土等検出状況（北から）



a. 垂穴住居跡001A壁溝 炭化材検出状況 (手前が住居内部)

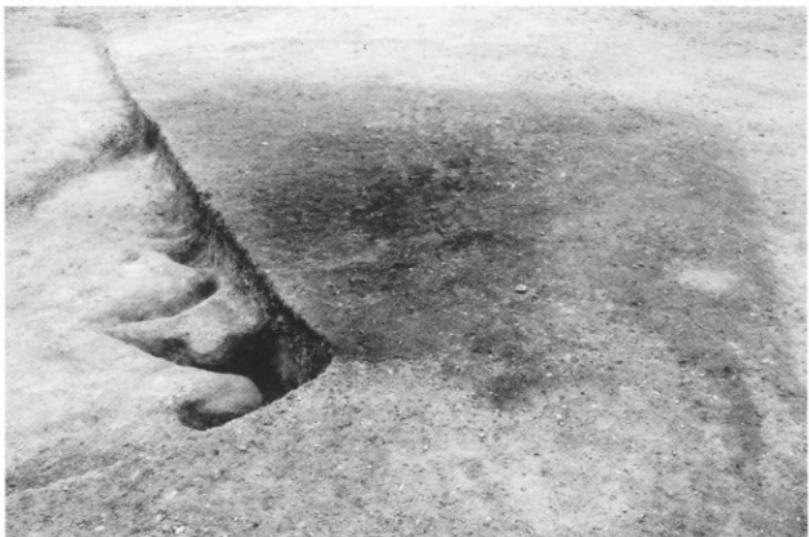


b. 垂穴住居跡001A壁溝 手形土器出土状況



d. 垂穴住居跡001A壁溝 断面炭化材検出状況 (右が住居内部)

c. 垂穴住居跡001A壁溝 炭化材出土状況 (手前が住居内部)



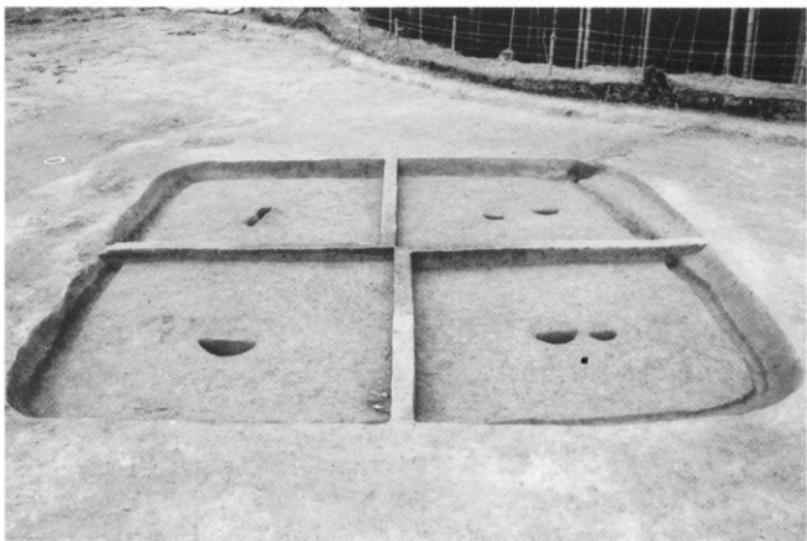
a. 2008年度調査区 墅穴住居跡002検出状況（南東から）



b. 2008年度調査区 墀穴住居跡002堆積土層断面（北西から）



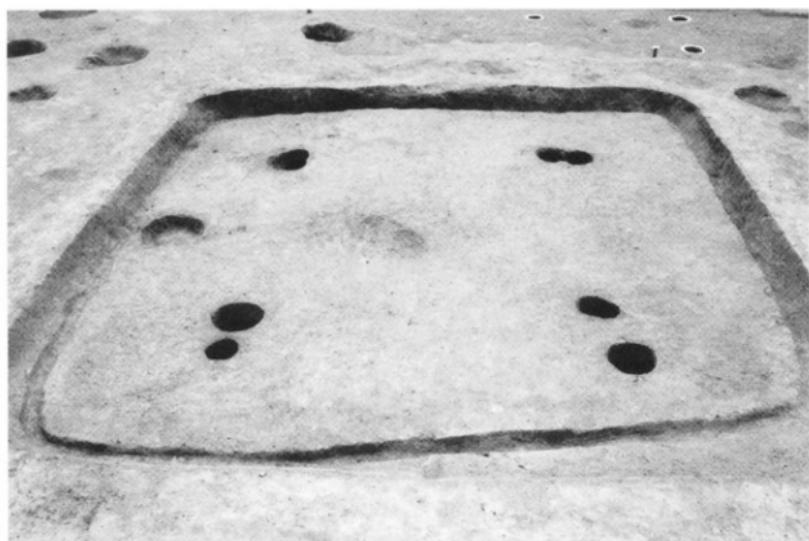
a. 2008年度調査区 堪穴住居跡003検出状況（南東から）



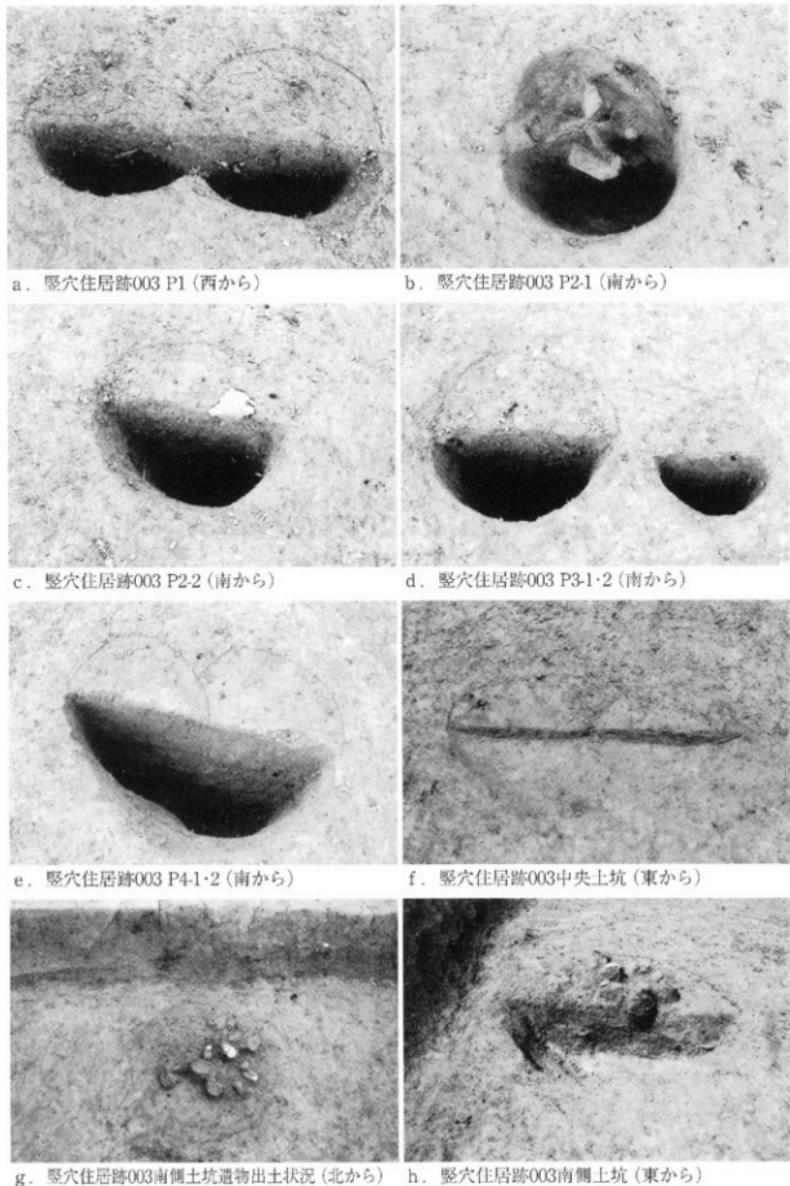
b. 2008年度調査区 堪穴住居跡003堆積土層断面（南東から）



a. 2008年度調査区 竪穴住居跡003完掘状況（南東から）



b. 同上（北東から）





a. 2008年度調査区 竪穴住居跡004完掘状況（西から）



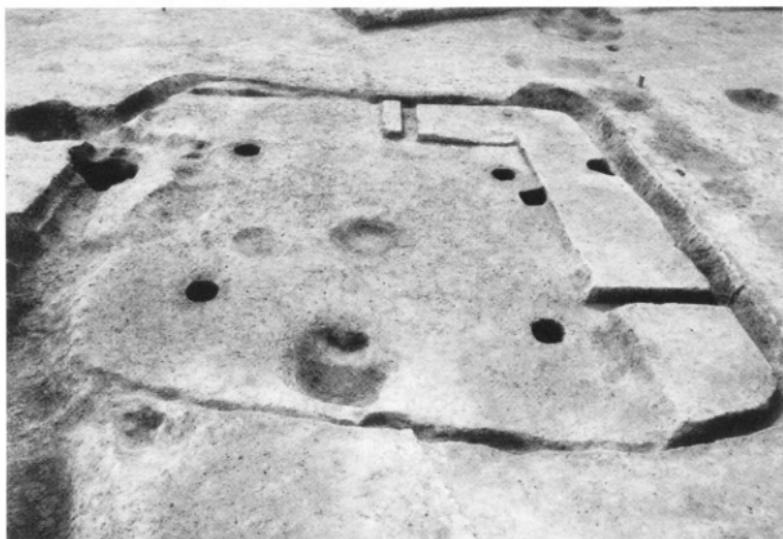
b. 同上（南東から）



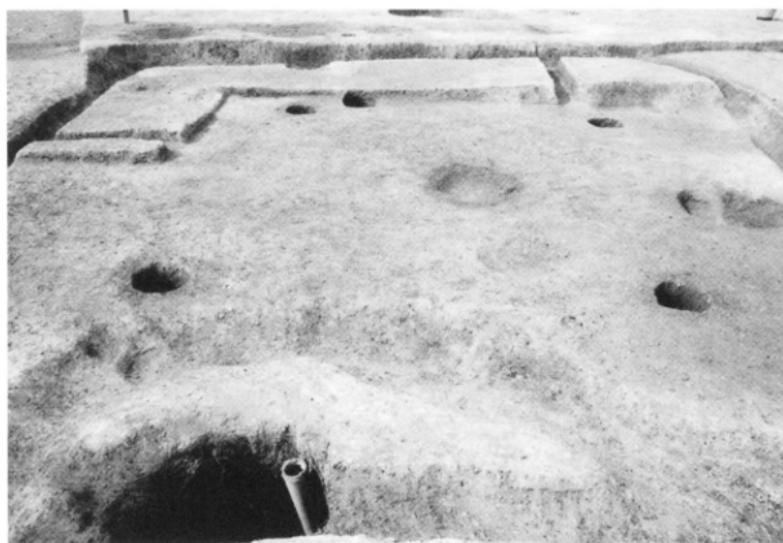
a. 2008年度調査区 墓穴住居跡005遺物検出状況（西から）



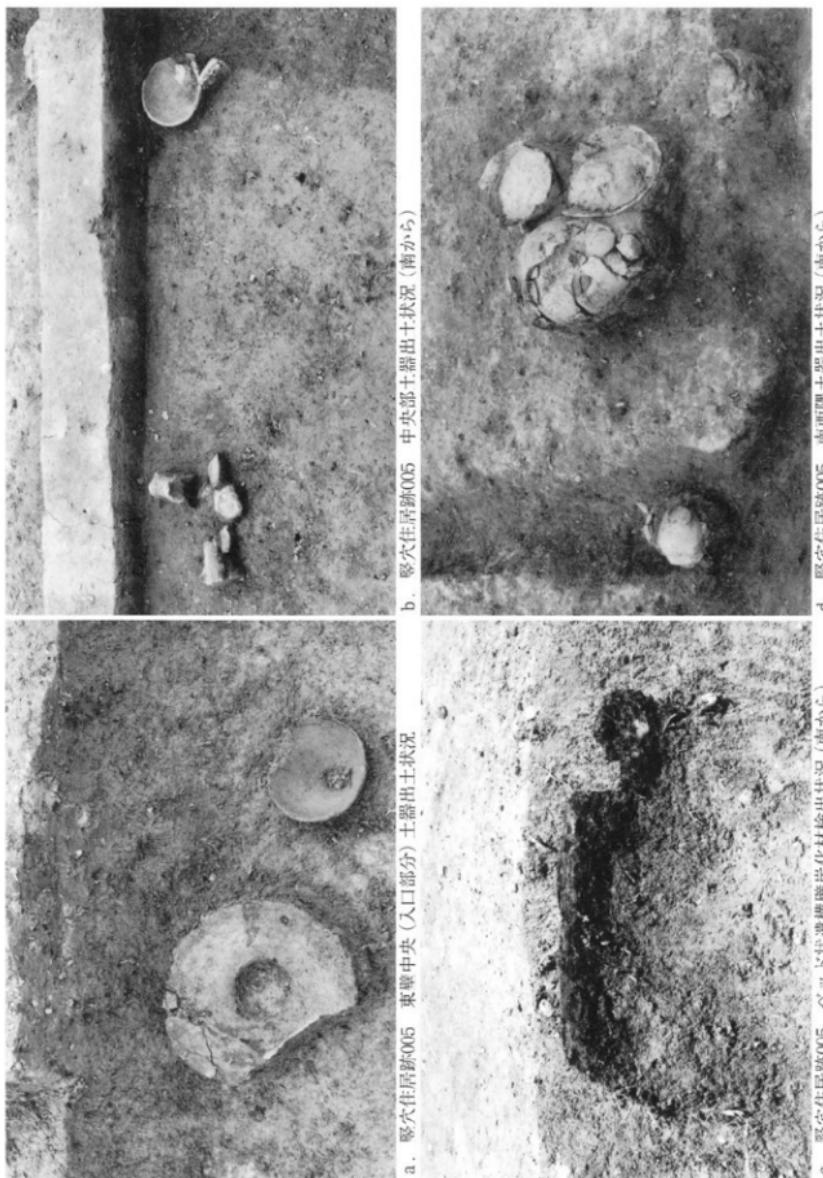
b. 2008年度調査区 墓穴住居跡005北側ベッド状遺構（西から）



a. 2008年度調査区 積穴住居跡005完掘状況（東から）



b. 2008年度調査区 積穴住居跡005完掘状況（南から）





a. 2008年度調査区 堅穴住居跡006堆積土層断面（南西から）



b. 2008年度調査区 堅穴住居跡006完掘状況（北東から）



a. 2008年度調査区 竪穴住居跡007完掘状況（西から）



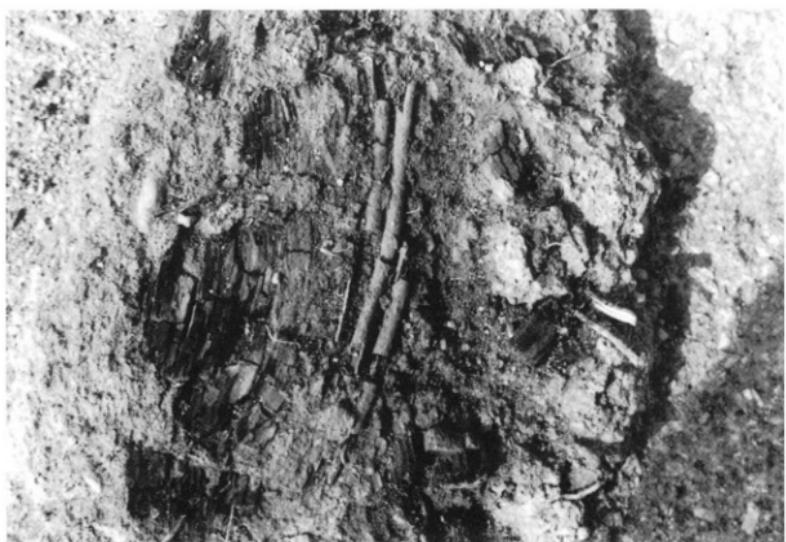
b. 2008年度調査区 竪穴住居跡007北西隅炭化材等検出状況



a. 2008年度調査区 竪穴住居跡008炭化材等検出状況（北東から）



b. 2008年度調査区 竪穴住居跡008完掘状況（南東から）



a. 2008年度調査区 竪穴住居跡008炭化材出土状況(1)



b. 同上(2)



a. 試掘・確認調査D調査区 竪穴住居跡009検出状況（南から）



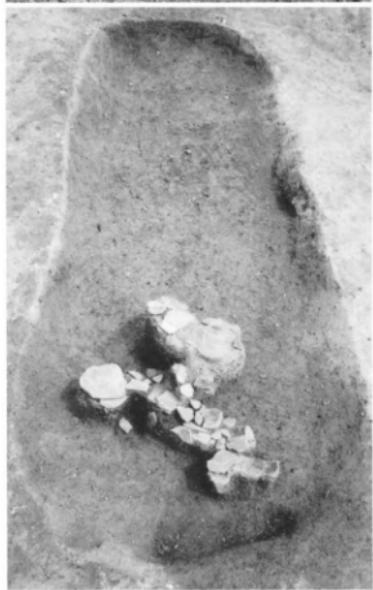
b. 2008年度調査区 竪穴住居跡009完掘状況（東から）



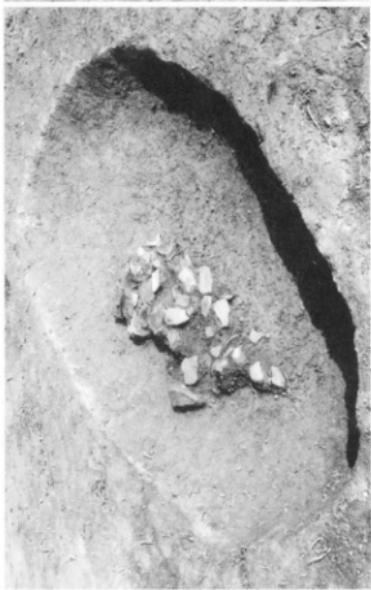
a. 土坑004 (南から)



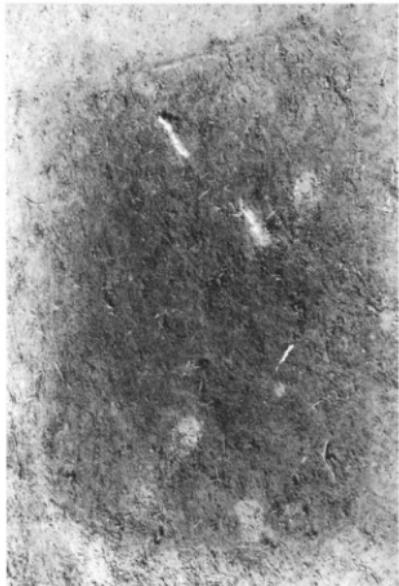
b. 土坑012 (東から)



c. 土坑013 (西から)



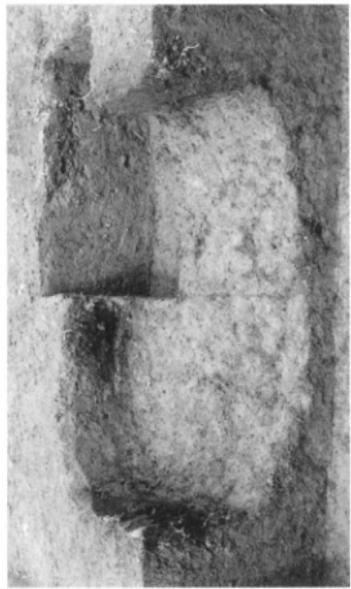
d. 土坑015 (北から)



a. 土坑003検出状況（北から）



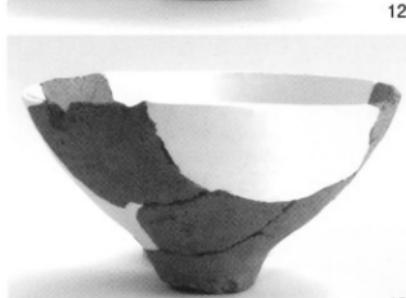
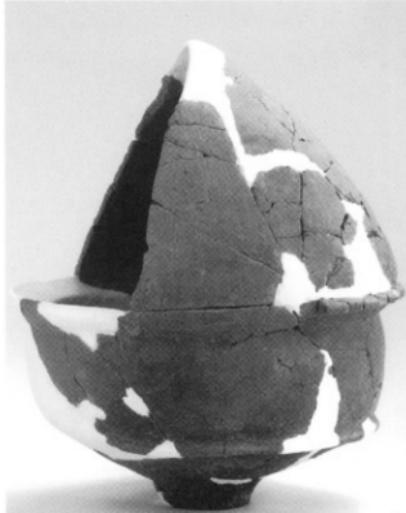
b. 土坑003堆積土層断面（北から）



d. 土坑003斬ち割り状況（北から）



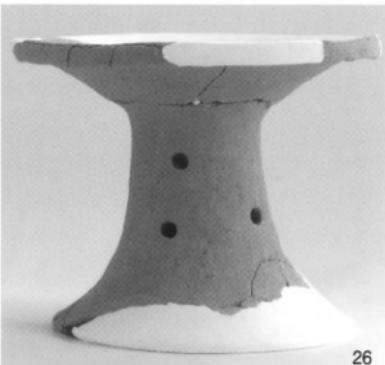
c. 土坑003完掘状況（北から）



弥生土器（1）



53



26



31



32



35



36

弥生土器(2)



65



88

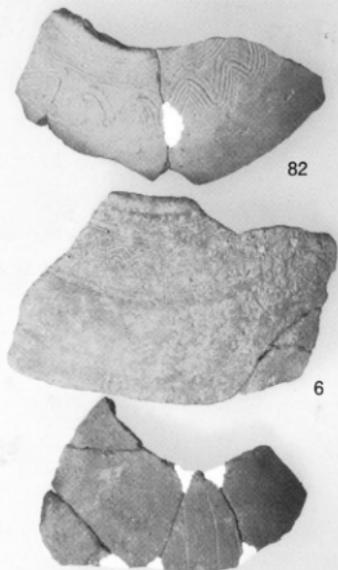


87



90

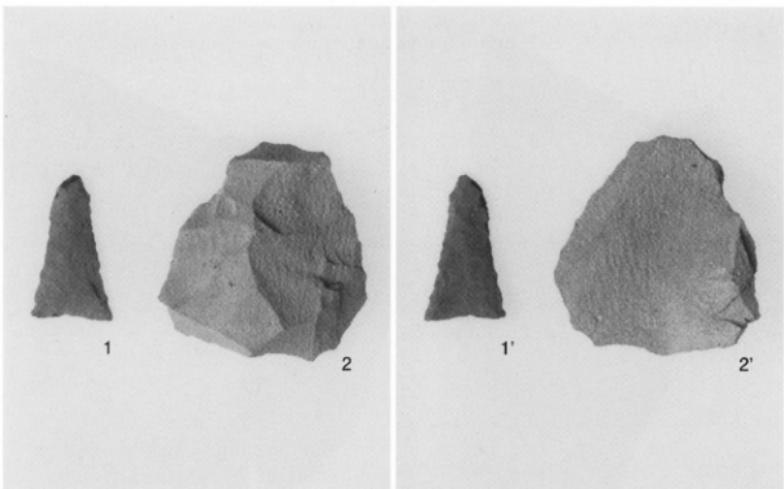
弥生土器（3）



(竪穴住居跡001)

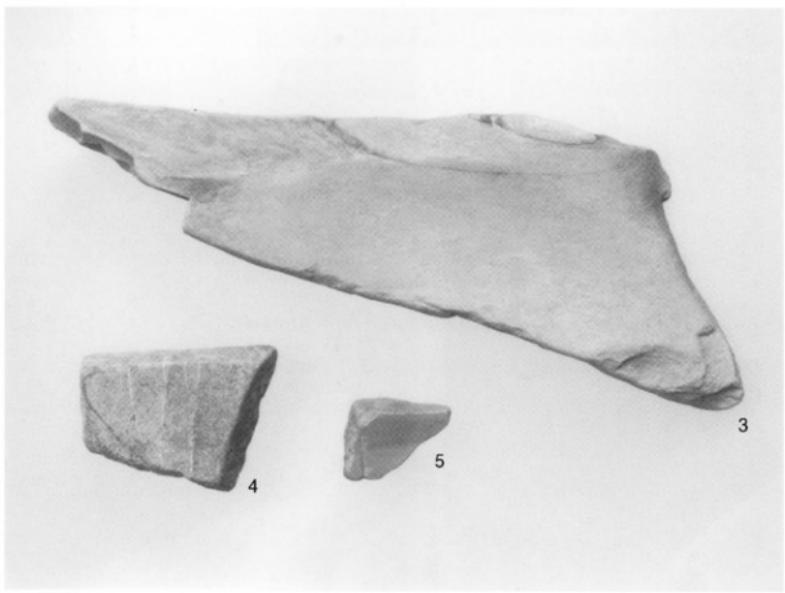


弥生土器(4)・焼土塊(竪穴住居跡001)・匙形土製品



a. 打製石器

b. 同(裏面)



c. 砥石



a. 古墳棺台石材接合状況（1）



b. 同（裏面）



c. 古墳棺台石材接合状況（2）

d. 同（裏面）

